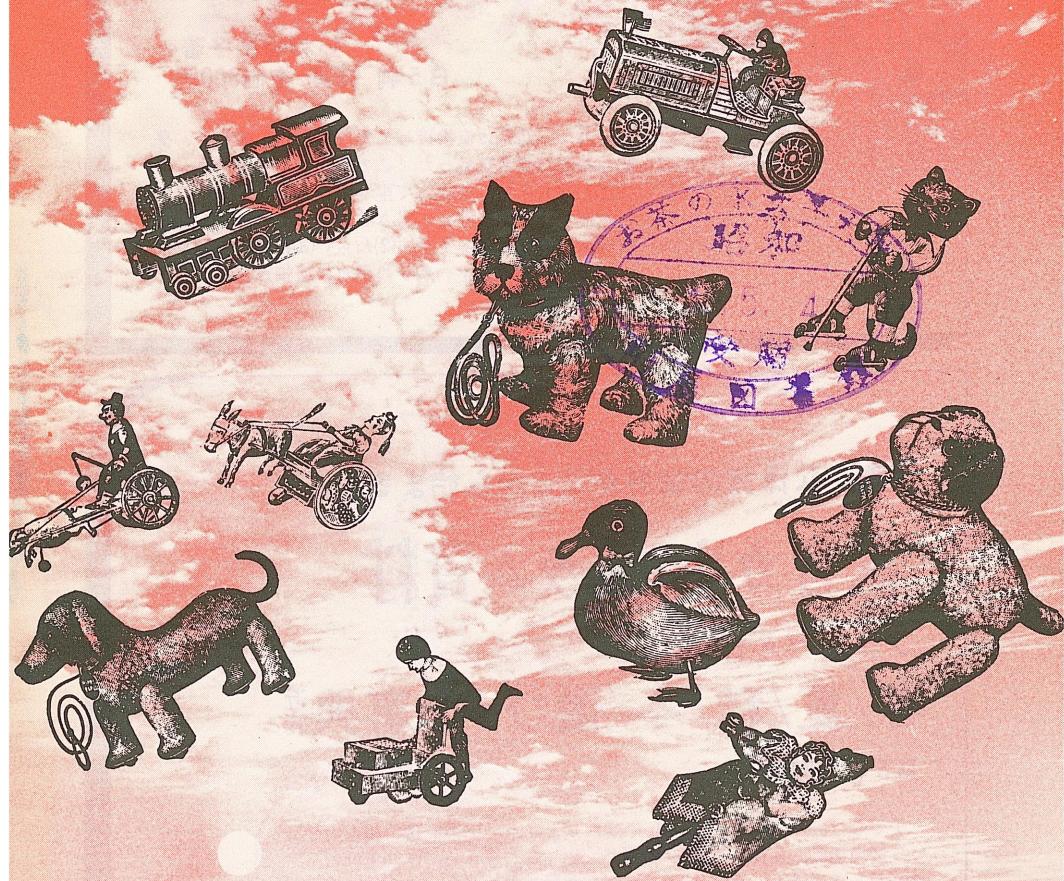


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



5

第七十三卷 第五号 日本幼稚園協会



>>> 新刊書 <<<

## 幼児のことばあそび

——年齢別指導の実際——

杉峰恵子著  
B5判 96頁 定価800円

本書は、幼児に直接接してきた著者が、楽しさ、夢及び知的な要素をもった「ことばあそび」を考案し、「ことばあそび」を通じて生き生きとした子どもに育てあげることを意図して書き著わしたもので、80の実例それぞれに(1)あそび方(2)ねらい(3)指導上の留意点を例記し、園の先生の明日の保育に直接役立つよう工夫されています。

豊かな保育の世界がここから始まる

## 保育カリキュラム資料

フレーベル館編

春/夏/秋/冬/遊び/小事典 近刊

B5判・136頁

子どもは一時としてじっとしてはおりません。その一瞬一瞬を力いっぱい活動し生活しているのです。せっかく苦心して作り上げたカリキュラム表も、あつというまにくずれされることもしばしばです。そんなとき、いつ、どこででもすぐに役立つのがこの資料集です。あしたのカリキュラムのためのヒントを集めた、あなたのための保育ハンドブックです。

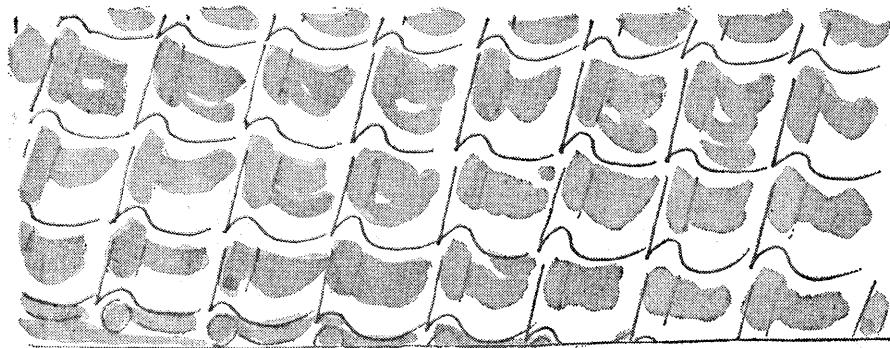
●お求めは幣社代理店・支社・支店・営業所へどうぞ

フレーベル館

# 幼児の教育

第七十三卷 第五号





## 幼児の教育 目次

——第七十三卷 五月号——

表紙 司修  
力ット 中島英子

©1974  
日本幼稚園協会

「子どもの日」に思う……………牛島義友(4)

出会い—それから……………秋山達子(8)

私の保育観……………荒牧富士子(11)

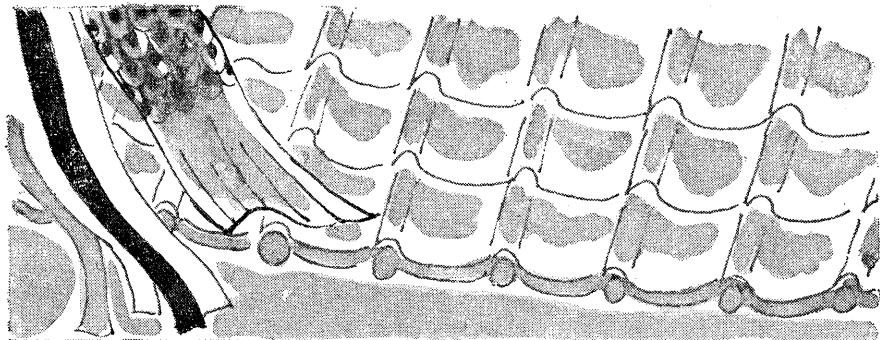
幼児と音楽……………加勢るり子(15)

幼児の唱歌のうつりかわり……………小林つや江(19)

### ☆講演

「幼児との教育」の中で学んだこと……………河辺果(23)

—教師は幼児と共に成長しているだらうか—



“いれ” “いいよ” を考える

石川 章子 (35)

—子どものあそびへの入り方—

私の保育 ..... 大多和 檀 (38)

私の保育 ..... 井上 紀枝 (41)

知恵おくれの子どもたち ..... 鍋嶋美春 (46)

一片付けーの意味 ..... 田中祐次 (50)

私と片付け ..... 堀合文子 (52)

山本秀子 (54)

橋詰良一著

「家なき幼稚園と実際」 より

(四)

(56)

# “子どもの日”に思う

牛島義友



世の親たちは日夜子どものことを思い煩っているとい  
う。しかしそれは主として子どもが病気をしたとか、友だ  
ちと遊べないとか、入学試験がせまっているというよう  
な、その時、その時の子どもの問題に引きずられがちであ  
る。しかし“子どもの日”にあたって改めて子どもの教育  
の問題を基本的に考え直すとか、あるいはすでに育児から  
解放された大人たちが次の代にならう者たちのあり方を考  
え直すなどということも、子どもの日といった特別な日が  
設定されたおかげである。近代生活はとくに生産本位に合  
理化されており、そのための人材の養成とか、勤務体制、  
生産管理などは整備されるが、それだけにこれらに束縛さ  
れ、管理された社会となり、生産から解放されて自由にも  
のを考えるということも少ない。それだけに年々くりかえ

して来る年中行事にも捨てがたい意義を感じる。特に子ど  
もにとっては、お正月、おひなさま、端午の節句、七夕、  
クリスマス、あるいは遠足、運動会、誕生日、といった年  
中行事にいかに喜びと期待をよせていていることであろうか。  
これらを適当に盛りこんだ年中行事式カリキュラムが残っ  
ているのもまた意味のあることである。

さて改まって今日の子どもの教育の問題を考えると、基  
本的には児童憲章とか、児童福祉法が浮かんでくる。戦後  
の日本の児童対策はこの線に沿つて進んできたものではあ  
るが、しかし二十五年の歳月を経て見ると、また考え方す  
べき諸問題もあり、厚生省の中央児童福祉審議会も反省作  
業にとりかかっている。その中で保育関係の答申として  
は、家庭保育を重視しながら、新しい社会の要求に応じた

多様な保育対策が説かれている。この家庭保育を尊重する態度は、一部の人からは依然とした保守的態度とみられ、児童の集団保育を積極的に推進すべきだという意見も強い。しかし家庭を重視したのは戦後の日本の児童福祉的一大功績であり、児童家庭局と改名し、文部省においても家庭教育振興を一つの柱としておることも誇りをもつて語り伝えたい。

しかしこのためにもただ母親は家庭に帰ればよいというわけではない。

#### ○子どもにふりまわされる母親

今日、夫の勤務先に転居して、育児に専念している母親は一見氣楽で幸せのように見えるが、終日子どもにふりまわされてノイローゼ気味になっている者も少なくない。ちょっと買物に出かけるにも留守をみてくれる老人はないし、近隣の人々とのつながりはないどころか、赤ちゃんの泣き声がうるさいとか、二階でもう少し静かに歩いてくれとか文句を聞かされるアパート生活ではせまい上に一層住みにくい。時たまの息ぬきも得られず、また子どもの方は母親に密着して片ときも離れなくなり、たった一人の幼児に母親の生活は完全にふりまわされてしまうことも少なく

ない。おとなしい母親はノイローゼになるし、ヒステリックな人ならば、つい子どもを拒否して逃げ出しだくもなる。子どもの放棄や虐待が意外にふえているのは、このような核家族化と都市の孤立生活が原因していると考えられる。姑との同居生活も煩わしいものではあつたが、アパートの一室に終日子どもと暮らすのも耐えがたいものである。このような母親が軽い職業を持ったり、健全な息ぬきをするためにもしばし家から離れることが必要となつてくる。近所に実家の親がいるとか、ベビーシッターの制度が普及することが、家庭保育を尊重するためにも必要となつてくる。

#### ○小学校に行くようになったら仕事をやめるという母親

二人の子どもを保育所にあづけながら働いている母親が、子どもが小学校に上がるようになると、仕事をやめて家庭育児に専念するつもりだといつて例がある。

子どもが児童の間は母親が家庭において、子どもが学校にでも行くようになつたら元の職場に復帰すれば一番よからうと考えられるが、その反対のこととなる。保育所であづかってくれる間は安心だが、子どもを鍵っ子にして不良にでもなつたら困るから家庭に戻るというのである。それは

ど保育所が信頼されるのはうれしいことではあるが、少しおかしい。家庭保育が大切であるというが、これが一番大切なのは一歳から三歳ぐらいの間である。愛育病院では乳児の昼夜保育を行なっているが、これを一歳になるまでとしている理由として、内藤院長は一歳すぎると、母親の存在が何よりも必要となるからといわれる。普通保育所では一歳児ごろからないとあづからないが、一歳児よりも乳児の方が意外に扱いやすいものである。健康や生活管理を完全にしておれば乳児は保育のわくの中にうまく入ってくれる。一歳児になつてはじめて保育所に入れると、母親から別れることができず、一ヶ月ぐらい保母さんがその子を抱きつづけるような例もある。特定の保育者への強い愛着の始まる時期でもある。母親がもつとも要求され、その日常的、皮膚的接触ならびに言語的刺激によつて成長し、また基本的性格が形成される。一方四歳ごろになると養育者である親以外に遊び友だちが求められ、またその友だち関係において社会性が育成される。この期になると家庭保育だけでは不十分で、幼稚園などによる集団保育が必要になる。さらに小学校に入学すると、教育の主導権は親から教師へ移り、家庭教育は学校教育の補助的役割となり、知識

教育のために、学校教育だけでも十分であり、教科書は学校においておき、家庭での学習は必要でないとするものさえある。この時期における家庭の母親は、ただ子どもの学校生活の緊張をほぐし、傷ついた心を治療するというふうな役割が残るくらいである。したがつて家庭保育は一歳から三歳ごろまでが、もつとも重要な時期であるとみると、さきではなかろうか。それなのに先に掲げたような親の新しい考え方は如何なものであろうか。子どもが小学校に行くようになつたらやめるような仕事ではなく、小学校に入つたから始めるような仕事を考へるべきではなかろうか。

#### ○幼稚園と保育所の関係

この二つの二元に対し一元化の論議されている。香川県は幼稚園が日本では全国一普及し、八十五%の者が通園している。しかも高松市以外はほとんど公立幼稚園である。この地においては、保育所は年少幼児が行き、四、五歳になると、幼稚園の方に移つてしまふという。別に年齢ではつきり区別したわけではなく、親たちの自然の選択からこのようになつたらしい。親にいわせると、幼稚園の方が保育料が安くなる。また学校側は幼稚園に行かないと遅れるといって幼稚園に行く方をすすめている。保育所としても

五歳児が少数残っていても保育がしにくいので幼稚園に行くことをすすめ、結果において両者は年齢で区別されるような傾向となっている。このような傾向が他の地方でも見られ、保育所には年長児が少なくなつたため集団遊びなどがしへくなつたという所もある。

もちろんこのよだな地域の母親は家庭で保育だけをしているわけではない。多くの母親は働きに出たり、ある地区では、室内工業として手袋の製造を行ない、景気よく働いている。幼稚園に行くようになると、保育後の時間をどのように解決しているかを目下調査中であるが、都会ほど核家庭化していないために、子どもの面倒を見てくれる家族もいるし、地域的にみても安全な遊び場と親切な近隣の眼が解決してくれているらしい。東京のような大都市でこの形態がとれるとも思えないが、香川県では幼稚園と保育所の問題を年齢的区分によつて解決しているらしい。これは今後の幼保の問題を考える上に一つの示唆を与えるものにちがいない。ただこのよだな考え方は幼稚園の学校的性格を強め、学童に対しては保育所が関与しないという態度が幼稚園児に対してもとられるものであり、この方面からの幼稚園の学校化が推進される危険がある。幼稚園保育は小

学校教育を下におろしただけでよいのであらうか。

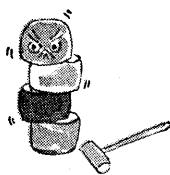
#### ○在宅指導

家庭保育を強調することは保育所を幼稚園化することではなく、家庭保育を補なうものとしての性格を一層強める必要がある。保育所で集団保育を強調するのではなく、家庭的ふん閑気を取り入れ、家庭から与えられる保育を十分に保育所においても受けられるようにすることではなかろうか。このためには保育所の建物から考え直す必要がある。

障害児の福祉についても同じことがいえる。従来は施設接護が主流であったが、障害者の基本的生存権を尊重し、家庭において十分生活を楽しみ、成長を保障されるのが望ましい。その意味で在宅指導が考えられるべきであつて、ただ経費節約のためから考えらるべきではない。同様に、施設の中でも家庭的なふん閑気が尊重されねばならない。今日の施設は設備は立派になつたが、その運営はますます家庭から遠ざかっている。家庭保育の強調は施設運営の方針を根本的に考え直すことを要求するであらう。

以上新しい幼児教育の問題として家庭保育を尊重した行き方の問題につき思いつゝまことにべた。

# 出会い——それから



## 秋山達子

チューリヒは、例年十月初めごろから天候が崩れて、雨や霧が多くなり、寒さが身にしみるようになる。それから三月末ごろまでの約半年は、アルプスから北ではほとんど太陽を見ることがない。暗く淋しいけれども、不思議と心が落着いて本をひもときたくなるような北ヨーロッパの冬がくる。表通りや中庭にたくさん椅子やテーブルを並べて、戸外でお茶や食事をサービスしていた街角のレストランも、表扉をぴったり閉めて、その中にもう一つ重いたれ幕をさげ、窓ガラスを二重にして冬に備える仕度がはじまる。その年に収穫したばかりのぶどうが、少し発酵しかけたワインになる一步手前の甘酢っぱいザウサーが出来わるものこのころであり、街にはイタリーに近いティツィーノ地方でとれる焼栗の香りがただよい出す。ヨーロッパの冬は急速にやってくる。

湖畔のレストランの涼しい木陰に腰をおろして、のんびりと道行く人や水鳥の遊ぶ姿を眺めながら、ヨーロッパ最初の夏を思う存分楽しんでいた私は、十月はじめにチューリヒのユンク研究所に学生として登録し、外国で外国语によるはじめての講義に、期待と不安のまぎりあつた落着かない気持ちで出席していた。

日本の多くの学徒がそうであるように、私も一度はヨーロッパで勉強してみたいものと漠然とした夢をいだいて、また多くの女性がそうであるように、なんとなくパリに憧れてフランス語の勉強をしたりしながら、たまたま訪れた機会をつかんで日本をたつてはきたけれども、どこの大学でどの先生について何を勉強しようというほど、はつきりした決心をしていたわけではなかつた。それでも、パリ大学で宗教学または東洋学を専攻してみようとい

う一応の目標がないでもなかつたけれども、訪れたパリは夏休みのせいもあつて、日本から紹介された先生方は皆、休暇で旅行中、パリ中にみられるのはアメリカ人や日本人の観光客ばかりで、東京とかわらないむし暑さや、外国人には冷たいフランスの空氣、安ホテルの味気なさなどから、すっかり意氣阻喪してしまつて、一刻も早くパリから逃げだしたい気分になつてしまつた。

今から十年も前のことではあるけれども、そのころのパリには既に語学やデザインの勉強に住みついていた日本女性は少なくなかつたし、なかには日本人観光客の通訳をしたり、香水店の売子をしながら勉強にはげんでいる方也有つたが、どの人にとってもパリ滞在をすすめて下さる方はいなかつた。予定を早めてパリを出た私は、どうやら言葉の通じるフランス語文化圏内の各都市をまわり、夏の終りに友人のいるチューリヒに落着いて善後策を考えることになつた。そして偶然開いた新聞に、一度訪れてみようと思つていたユンク研究所で、中国古典の『易經』の講義があることを知り、外国人が中国古典をどのように解釈するのだろうかといふ興味も手伝つて、地図を片手に研究所の扉をたたいたのである。ユンク研究所はチューリヒの山手の、美術館や劇場、大学付属の研究所が多い静かな一画にあり、つたのからんだ少し大きめの洋館の二階で、うつかりすると通り過ぎてしまうような目立た

ない建物の中にある。日本で普通考えられている研究所や学校のイメージとはあまりにも違うので、よく日本から訪ねられる方が、通りの反対側にある中学校の方にまちがつて行つてしまわれたりするくらいで、その時の私はその小さな研究所の一室がその後四年間にわたる私の心の住みかになるであろうとは考えてもいなかつた。

その時、外国でのはじめての外国语の講義にどこまでついていくものかと小さくなつて教室の後ろの方にそつとすわつた私の目に、なによりも心強くうつったのが、東洋からきたらしい人の姿であつた。そして最初の休憩時間に久しぶりの日本語で話しかえたのが、現在京都大学にいられる河合隼雄先生、同志社大学にいられる樋口和彦先生、そしてソウル大学に帰つていられるという韓国からの李先生であつた。はじめてお目にかかつた先生方であり、紹介状の一つも持つていなかつたにもかかわらず、さつそく研究所のようすやら、入所の手続きなどを細かく教えて下さつたご好意は、今でも忘れられない。五月以来約四ヶ月の外国の人旅で緊張しつづけであった私は、ほつと肩の荷をおろしたようを感じた。お昼をご一緒にすることになつて、近所の美術館付属の明るいレストランで、日本にいたころの私にかえつて、元気におしゃべりをしながら、透明なガラスのコップに入つた暖かい一

杯の紅茶を飲んだ時の、心暖まる気持ちはその時の私にとって涙が出来るほどうれしいものであった。

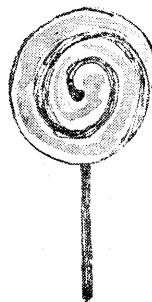
外国旅行といふものは、緊張して走りまわっている間はそれほど意識をしないものであるけれども、心中ではいろいろな印象がまざりあって、知らないうちに非常に疲れるものである。そんな時に出会う小さな出来事が、肯定的にも否定的にも大きな影響を心に与えることがある。最近よく聞く外国での、特に女性の出会う事故も、このような所に原因があるのではないかとも思われる。かつて私がしたように、はつきりとした目標をもたずに外国へ出されるることは決しておすすめできないが、もととしつかりした気持ちで行かれても、行ってから予定通りにはことが運ばないことも多い。そして外国では偶然の重なりや、意外の出会いが大きな意味をもつことが多い。仏教学を専攻していた私は、フロイトやユンクはおろか、一般心理学についても大学での教養課程で得た知識以上にはもつていなかつたし、精神分析はそのころの私にとってあまりにも縁遠い学問であった。またいろいろの方から話には聞いていたけれども、特にユンク心理学にはつきりした意識も興味もあったわけではない。にもかかわらずユンク研究所になんとなく籍をおくことに決め、それから後四年間にわたってユンク心理学を学ぶことになったのは、このような偶然の出会いの

数々を背景としている。このような態度は西洋的な行き方から考えれば、まったく自主性がないともいえるかも知れない。私のあまりにも漠然とした、無意識のなにものかに導かれて行動するようなあり方は、自分を中心とした意識的で明快な西洋のあり方と、当然ぶつからずにはいられなかつた。

窓外にはチラチラと舞いだした粉雪が急に量を増して、まんじ模様を描いていた。暖房のよくきいた教室で、ユンクの高弟だったという老婦人の講義に耳をかたむけていた私は、急に背筋に寒さを感じて教室の一隅に席をかえ、先生に背を向けて雪景色を見入ってしまった。講義の中の頭からのしかかってくるような老婦人の激情的な声、大仰な身振り、押しつけてくるような個我の強さに私は耐えられなかつた。それは西洋的といえば強さであるが、東洋的には見苦しいほどの自己の主張に思えた。それからの四年間の毎日は、このような西洋との出会いにおける私の精一杯の闘いと理解に明けくれた。異なる文化の出会いの火花の中できだえられて、今日の私があるものと思う。そしてその時の経験を生かして創造していくことが私の使命であるとも思う。

# 私 の 保 育 觀

## 荒 牧 富 士 子



三年前の初秋、私は東ドイツの町のデパートで記念にと思い、

ドイツの子どもの写真についている数枚の絵葉書を買い求めた。

そして帰京してからある日のこと短大の保育科のS助教授にこ  
れを見せた。「これは東ドイツで買って来た絵葉書なのよ、白黒  
だけどよい写真でしょ?」といいながら……。するとS助教授は  
黙つて見ておられたが感にたえないように、「ウーン、人間がい  
る……という感じね」と一言いわれたのである。

この絵葉書の写真的のバックは自然の野である。それは造られた  
公園でも、立派な庭園でも、人工的なライトの光るスタジオでも  
ない。雑草のおい茂る太陽の光の燐々とありそぞぐ野つ原であ  
る。子どもたちは町のなかにいるドイツの子どもたちと同じよう  
に、飾り気のない服装をし、喜々として花を眺めたり、乳母車に

玩具の熊の子をのせて遊んだりしている、ただそれだけである。

私はこの絵葉書をもう一度見なおして、人間がいる……という感じ  
ね、といわれたS助教授のことばをもう一度かみしめて考えてみ  
た。私たちの園でも教師たちが日々関わりをもつてゐる子どもた  
ちの毎日の生活を、人間らしく、人間の子どもらしく、子どもが  
子どもとしての生活を見いだすような園にしていきたい、そのこ  
とによつて彼らの生活を充実したものにしてやりたい、というの  
が日々の課題でもあつたが、改めてこの絵葉書に対するS助教授  
の発言は、はからずも私の保育の場でおお続けてこのことを考え  
るよいきつかけともなつた。

私たちの園はもとは静かな住宅街のなかに位置し、園の前の通  
りも片側通行で車は一方からしか走つて来なかつた。それが両側

に車が右往左往しだし、信号なしでは渡れない状態になり、ビルが周りに次々と建ち、青空はしだいにその視野をせばめられて来ている。子どもたちの住居はほとんど庭のない狭いアパートやマンション、それでなければ狭い庭と日照権を奪われた店の二階、またよい庭と広い家に住んでいる子どもたちは、大人本位に飾られ、人工的に造られた生活をしているものが多い。たとえ充ちたり生活をしていても、高級な玩具を持つている子どもがあつたとしても、子どもがもつとも求めているものがあまり本気で考えられていない。私たちの園の子どもたちは、このようにして不自然な環境のなかに毎日を生活しているのが大部分である。そこで私の園では、まず子どもたちにくついてまわっている、母親やその家庭をも含めての価値感のようなものをえていかなければならない。今まで子どもたちに影響を与えていた不自然なもののが影響から抜け出させてやることが、大きな役目なのである。大げさにいえば、外側に人工的にねらされているものがあればそれを洗いとつて、もう一度子どもとしての人間に返すことなのである。

私たちの園の保育のなかでは、子どもたちに神を仰ぐ心情を養うことを大切な目標としているが、子どもを子どもらしくということのなかに、神に近づかせるということによって子どもとしての姿があらわれてくるのではないかということを思つて保育としている。現代は神を知るにはあまりにも神と人間との間に余計なものが介在しすぎている。子どもたちに天地を創造した神を知らないものに直接触れて、その神秘さ、偉大さ、計画や現象や仕組などを知ることができないようになつて来ている。『み空の色のみずあざぎ』と昔の詩人が忘れた草をうたつたが、その『み空の色』を子どもたちの瞳にうつしてやることがむずかしくなり、それによつて神を見ることがむずかしくなつて来ているのではないかだろうか。風の音も、雷の音も、雨の音も、そして飛行機の爆音や、車の音が、それらの自然の音と異なつた感じを持つ、などということもアルミサッシュの戸の密室のなかで生活している子どもたちには、直接伝わつて来なくなつてゐるのではないか。恐ろしい音を聞くことはないかもしけないが、神の大きな力を感じじとることのできない、あまりにも不自然な状態であると思う。

こんな子どもたちに、保育の場では直接自然との関わりを持つときを与えてやらなければならないと考え、あまり大きくない庭は土のままにしてある。風が吹くとほこりが舞い、廊下までざらざらになつてしまふ。雨が降るとすぐ水たまりができる、ぬかるみとなる。何度も、小学校々庭のようにきれいにかためてしまつた

ら、といわれたが、教師たちで“これでよい”ということにして

いる。むき出しのその土の庭は、直接自然が子どもたちに訴えるよい場所である。雨が降るとぬかるみができ、水たまりになつたとき、子どもたちは水たまりに石を投げ、その波紋を眺めたり、自分の姿や空のうつるのを見て感激している。ぬかるみにわざと入つて自転車でそこを通り、そばで他の子どもがしゃがんでじつと、そのタイヤの跡を眺めていたりする。霜柱のたつたときは大変な驚き方で、ハンカチでつつんで室に入り、とけて何もなくなつたときの不思議にびっくりする。いったん土のなかに入つた種の大半は必ず芽を出す。ただし子どもたちがどんなに水をやろうと出て来ない芽もあり、また忘れたころにひょこっと顔を出す芽もあり、千差万別である。

神を知るために神のなされるふしげな計画や仕組などを知るために、自然をただ素晴らしい、素適だ！ と、情緒的にとらえられるばかりでは本当の意味での神に近いという実感はないと思う。私の園では台風が襲来したとき、一度休園しないでころあいを見つけて幼稚園に子どもたちを連れて来てもらい、烈しい雨風を園内で体験させたことがあった。大きなちようや松の木その他の植木が風によってゆきゆきとゆれ、子どもたちはガラス戸に鼻をおしつけて庭の風の吹くありさまを物もいわず眺めた。子どもたちは家にいたらこの台風の物凄い威力を感じないですごしてしまった

と思う。翌朝庭は木の葉で埋めつくされる。このような風の後はすべり台の上や、その他の場所に一ぱいになつた落ち葉を子どもたちは掃く。子どもたちは手を使ってでも張り切つて落ち葉の掃除をする。

年長組の当番の子どもたちは、四月より責任のある仕事が課せられる。庭の遊具のすべり台のスノコや、タイコ橋の下のスノコなどは相当の重量があるが、友だち同志で協力して並べたり、はじめこんだりする。ブランコも、子どもたちでかける。教師は助けることをするが、子どもたち自身が、その物体の性質をじかに感じ、どうしたら下げることができるか、を知らせるようにしていれる。庭の草木や観用植物への水やり、種を蒔いたところへの水やり、なども、いろいろなやり方を考へて自分でする。しばらくすると小鳥のかごの掃除も始める。糞でよごれた紙の取り替え、水を新しくし餌を替え、菜っぱをいれてやる。自分たちの力で自分の考えでこれらのこと試みていくうちに、小鳥の籠の床面積も目で見てすぐどの位の大きさの紙を入れたらよいかがわかるようになる。冬には庭に来る鳥たちに餌をやる。リンゴを包丁で切り、パンくずをまく。

私たちの園にはずっとテレビがない。教師の室にはあるが子どもの生活の場には置いていない。神に近く、神の創りたもうた自

然界のすべての仕組のなかに子どもたちをじかに置いてやるためにも、また充実した遊びを中断しないためにも、現代のテレビ番組の程度であつたら、そのための時間取るのは私たちの園の子どもたちにはもつたいない。生の自然の声、生の人の声、生の音樂、そしてさわることのできる身の周りの数々の出来ごと、このようなものを生活のなかにたくさん盛り込みたいと思うときに、私の園の子どもたちにはあまりにもその犠牲が大きすぎる。

私たちの園の教師陣のぞみは、この遊びを充実したものにするための質のよい遊具やたくさんの素材、を手に入れることである。子どもたちが自分で考えて、自分で物とぶつかって、そこで新しい発見をする、またその物を操りながら、その扱いをより巧みに操れるようになるときが与えられ、またおなじ仲間同志とぶつかりあいながら、下手な仲間作りから上手な仲間づくりを自分たちで創造してゆく、そのような場を持つことによつて、人間の子どもとしての目が開け、心が育つ、と思っている。

都會の子どもたちは、いや、日本全体の子どもたちといつてもよいかもしれない。自然そのもののなかに身を置き、その喜びがどんなに深いものか、がしだいに解らなくなつてきてるのではないだろうか？

私の園の子どもたちの問題を考えて、こんな保育を：と毎日やつているうちに、余計な心配までしてしまうようになった。宗教教育といって神の話はしても、子どもたちが本当に神のなされる業をじかに感じさせるために、私たちは努力をしているのだろうか？

手づくりの服を着て、子どもらしい喜びにあふれた笑顔で、雑草のなかでたましく太陽の光にこたえている東ドイツの子どもたちを羨しがるだけでなく、私たちの園でも、子どもたちが子どもらしい喜びをいっぱい持て毎日の生活を充実したものにしてやりたい。そしてその生活を通して、神が近くいたまい、守り導いてくださることを知らせ、その愛にこたえる生活を自分も他の人に及ぼすような子どもたちの集団をつくつていきたいと、教師たちは願い祈つてゐるのである。

(東洋英和幼稚園)

# 幼児と音楽



## 加勢るり子

新幹線の窓外風景は、あまりにも速くめまぐるしく移り変わるの、旅情を誘われるどころか、私たちの平静な心まで、落着かないものにされてしまします。近ごろの世相もこれに似ています。ただ普通に人間らしく生きたいだけの私たちの生活や願いは、そしらぬ顔の現代文明によっていつの間にかかき乱され、何かしら不安な気分におちいらされてしまうのです。

昔から、音楽ほど直接的・本能的に人間と結びつきやすいものはない、といわれてきましたが、この音楽に関しても同じようなことがいえましょう。私たちは、人間としてこの世に初めて顔を出した、赤ん坊のその瞬間から、既に産業化されたコマーシャルソングや、ソングや、ショー的要素の濃い流行歌のまっただ中にぼうり出されるのです。そして「赤ちゃんのための音楽」「幼児のためのリトミック音楽」「幼児の新しいうた」等々、これまた商品化され

規格品化された、生命力稀薄な缶づめ音楽を、善意ではあるが良識を欠いた母親の判断により、毎日ひたすら聞かされることになります。また日がたつにつれ増大する、私たちをとりまく音楽環境の多様・多質なことは、世界中で、この日本が一番ではないかとさえ思えます。はじめにあげたコマーシャルソングや歌謡曲のほかにも、クラシック、ポピュラー、ポップス、ジャズ、わらべ唄、淨瑠璃、雅楽、民謡等々、数えあげればきりがありません。このような種々雑多な音楽の氾濫は、私たちの音楽環境が豊かなのだなどといえるていのものではなく、むしろ反対に、大変危険な、音楽的貧困をも招きかねない混乱した状況なのだと知るべきでしょう。

なぜならば、純度の高い生来の聴覚感覚は、その機能 자체がもつ限界の中での経過や手続きのうえにのみ、成り立ち保たれ、また

開発されるのであって、その限界を越えていたり、適応外の条件があつたりする場合には、折角の機能が生かされなくなるからです。すなわち、聴覚は鈍化し、麻痺して、音楽を想像させるにいたらず、全くの無反応状態や、拒絶反応をひきおこすような、かえってマイナスの結果を生む可能性があるのです。

人間の目には、赤外線・紫外線は受けとめられないことは常識ですが、耳にも限界のあることはあまり知られていないようです。そこでこれから、人間の耳、聴覚について少しふれてみたいと思います。

耳は、一秒間の振動数が二十から二万サイクルの音の範囲しか受けとめることができません。またこれらを受けとめるために必要な聴覚神経は、生後八ヵ月ぐらいで整備されるといいます。（ゼロ歳からの音楽教育や音楽治療が呼ばれるゆえんです）そして一般には、耳というものは、同種属の声を聞くことを中心に進化してきたせいで、私たちの耳は人間の音声に対して最も感度が高いなどともいわれています。

この音声に関しては、おもしろい、研究報告についての記事を読んだことがあります。これは、さる病院での赤ちゃんに対する科学的実験結果なのですが、それによると、赤ちゃんの好きな音声の一番は、母親のやさしい声で、これに続いては子どもの声に

反応を示し、父親を含む男性の声は最低で、人気がなかつたそうです。興味あることは、この順位が、赤ちゃんが、これら三種類の音声と日常接する状況での、その時期・時間量・距離のそれぞれの順列に、いみじくもまさしく正比例していたことです。

もちろん、この一事例を、ただちに一般論におきかえて考へることは無理ですし、その気もありません。ただ私は、日本の母親中心の家庭環境を考えるとき、子どもが人間として生きて行く基本条件の一つである聴覚に対する正確な認識をもつことは、子どもに最も大きい影響力をもつすべての母親にとって、非常に大切なことではないかと思うのです。またもう一つ、人間が本性として備えている無条件反射と探究反射の本能に關しても（『脳・行動のメカニズム』千葉康則、NHKブックス参照）、聴覚と結びつけて認識しなおしてほしいものと思うのです。

最近ではいろいろな領域で、幼児期が、人間形成にもつとも重要な時期であることが、学問的・科学的に実証されてきました。けれども何といっても、適時性に視点をあてるとき、第一に思い浮かぶのは音楽の領域ではないでしょうか。脳生理学の進歩によつて、聴神経がもつとも活発に活動するのが、平均的に四・五歳の時期にあたることがはつきりしたからです。まさに幼児期こそ、音楽の分野での「要」<sup>かなう</sup>のときといえるでしょう。

そこでこの「要」のときに、耳が最も強い感覺を示す音声によつて、この時期の子どもにびつたりした音楽を与えることができるれば理想的ではないか、との考えも生まれてくるわけです。

ところで、幼児にびつたりした、音声のファクターを含む音楽とは何でしょう。これが大問題なのです。

幼児にとっては、雨・風の音や、鳥の声などの自然音を聞くことも、あそびの形態の中でゆれ動くわらべ唄のふしまわしに乗ることも、もしかすると「野や山の静けさ」「夜の静けさ」までを、音の世界としてとらえることも、自由自在なのかもしれません。

そして一方、ブラウン管の画像そのままの身ぶり手ぶりで流行歌をうたうことも、音やリズムのランダムな動きをジャズることも、端正な外国人のメロディを口の端にのせるのもまた、自由自在なのかもしれません。

問題なのは、子どもの音楽に関する、現象のいろいろを判断したり、それによってとかくの操作を行なうのは、すべて外側からの大人の目によるものであり、その大人たちは、多かれ少なかれ、わが国の明治以来の音楽教育の影響を受けてしまっている、ということなのです。この音楽教育の内容が洋楽偏重であつたことは、わが国全般の文化現象からみて、やむを得ないものであつたとは思いますが、現実に、一般社会や学校で、音楽だけが別格

視されたり、「音楽はわからない」「私は音痴なので……」などの言葉に接したりすると、つくづく日本における現在の音楽の土壤について、考えこんでしまうのです。

私が経験してきたヨーロッパ諸外国では、音楽はその国の社会・生活の中に、きり離しようなく融けこんでおり、大人・子どもの中別なしに、ただ、本物の音楽、よりよい音楽、より美しい音楽、などの表現にみあう共通のものさしで、より分けられていくようでした。たとえば、自國の音楽性に根ざした音楽教育が保育園から系統的にほどこされているハンガリーでもそうでしたし、系統的とまでは行かなくても、幼稚園で自國のわらべ唄を自由に多様に活用しているフランスやドイツでもそうでした。

おそらくこれらの国ぐるでは、大人が子どもであつたときの自分を見失うことなく、子どものものであると同時に大人のものであるようなものを、時間をかけて育てて行つたのにもがいありません。このことは、子どもといえどもまず一個の人間として考えられ、この思潮が、これら諸国社会の基盤の中に、はつきり読みとれることがあります。このような国ぐるでは、「児童文化」と「大人の文化」との間の断絶または断層があるとしていることにもかかわっていると思われます。

本当の音楽とは、子どもにもわかるし大人にもわかる、そして他

面子どものしかわからないし大人にしかわからないつまり、子どもにも大人にもびつたりしたものを見ているように思えるのです。

それにひきかえ、今だに、弱者である子どもを親が私物化する社会現象の絶えない、権威主義的文化風土をもつ日本には、さきにふれたような、わが国の大人の音楽的体質とあいまって、とかく、子どもの音楽生活について、真剣に考えない風潮があるようです。そこから、子どもに対してもマイナスになるような音楽環境が生じたり、結果的には無責任な、子どもにとって無理な音楽活動を強いる行為が生まれたりするというわけです。

私はある時点から、われわれ独自の日本語を持つ、日本人固有の音楽性に根ざした系統的な音楽教育を目指して、実践の中で研究を始めました。具体的には、ハンガリーの「自國のわらべ唄」とあそび」から出発するコダーリ・システムを参考にしました。このシステムの持つ、一つ一つの理念や内容や方法を、いろいろの角度から検討し、日本の現状に合わせての演繹を試みたのです。そして試行錯誤のこの研究過程で考えさせられた最大の事柄は、ほかでもない次のことです。それは、音楽教育がどうのこうのという前に、私たち大人は、音楽と子どもへの認識と理解を、もつともっと深めて行かなければならないという、しごくあたり

まることでした。

本当は、何よりも、小さい子どもたちの音に対する感受性の鋭さを損なわないために、抑圧された音の世界と、配慮された音の世界の構成による、子どもの音の環境の純化が必要なのです。

「本当は」と言ったのは、東京のような雑ばくな大都会では、このような環境は、とても急速には望めない事実がわかつているからです。

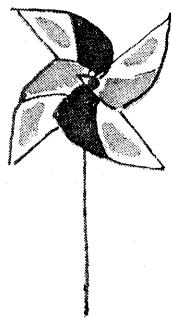
現代とは、伝統の創造的な継承を考えるとともに、国際化の潮流に従わざるを得ない時代です。しかも価値の喪失が言われ、人間疎外の不安が伴う時代でもあります。この中を生きぬくには、強じんで豊かな感性と心が何よりの支えとなりましょう。本当の音楽を世界中から選んで幼児のときから聞かせましょう。お母さんは少しぐらい音がはすれても子守歌をどんどん歌いましょう。

幼稚園では、わらべ唄的性格のものを優先してとりあげ、子どものは自發的な即興性をひき出す方向に展開させましょう。音楽は永遠のものだし、子どもには何より感動が大切です。

(コダーリシステム研究会)

# 幼児の唱歌の

## うつりかわり



### 小林やつ

幼児の「うた」について昔から今までどのように変わってきたかについて考えてみたいと思います。

「幼児の歌」は大昔からあったようですが、このたびは明治のはじめにさかのぼってみます。

明治五年に学制が公布されましたが、「唱歌は当分之を缺く」とありました。明治七年伊沢修二は新設の愛知県師範学校長となつた時同校付属幼稚園で「遊戲唱歌」の指導をしていました。この時外国曲（スペイン民謡）に當時師範学校の先生野村秋足（有名な国学者）に命じて、「何かこの地方におもしろい童謡があつたら採用したいからさがすように」といいました。野村先生は蝶々の童謡をとりその下半分をかえて今日のような歌詞にしたといつています。このことは現代の「わらべうた」運動の元祖といつてもよいでしょう。またその唱歌に「遊戯」（手ぶり）をつけて歌わせたところ非常に喜んだということです。このほかに「椿」「ねずみ」など研究がされています。

明治六年に東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）が開設され、同九年には付属幼稚園が開設されました。その保育科目の細目に「唱歌」がありました。また明治十一年文部省が出しました幼稚園保母練習科規則中に「音楽唱歌」が学科としてのつていまです。このようなことから、東京女子師範学校は十一年に式部雅楽

# 風車

「保育唱歌」より

1. かさざるまのかみぜの  
2. みづぐぐるまのりり  
まにまに一にめぐぐるな  
やや一ままずめぐぐるも  
ややまますめぐぐるも

科に「保育唱歌」の作製を依頼しました。「風車」「冬の団居」「越天楽」などを幼児に教えました。これが音楽教育の初めであります。

西では愛知師範学校、東では東京女子師範学校と時を同じくして幼児の歌曲を研究をされたことはおもしろいと思います。

上の「風車」を歌ってみてください。のどかな曲想をもつていて中で現代でも歌われている歌曲は

- 「幼稚園唱歌集」(全三十九曲)は明治二十年(文部省音楽取調掛)に出版されながら幼児教育のために歌われました。この

- 「蝶々」「かすみかくもか」「若駒」「風車」「密蜂」「かぞえうた」など、この中の「風車」は雅楽で作曲され、「かぞえうた」はわらべうたです。あとの曲は外国曲に日本の歌詞がつけられています。明治十七年国語学者の物部高見が言文一致論を提唱してから言文一致唱歌が作られるようになりました。
- 「幼稚園唱歌」は滝廉太郎編で明治三十四年に出版されました。これは日常のはなし言葉に曲がつけられていますので親しみやすく、歌いやすく現在でも「水あそび」「ほとばしほ」「お正月」など、あそびがつけられて歌っています。

ついに大正時代になり、

- 「赤い鳥童謡集」は一集から八集まで（大正八年—十四年）出版されました。これは大正七年鈴木三重吉編集の児童雑誌「赤い鳥」の中の詩に作曲したもので、今までの唱歌とはうつてかわった自由な童心をうたっています。そして童謡全盛時代をつくりました。「雨」「金魚のひるね」「靴が鳴る」などたくさんよい童謡ができました。
- 「えほんしようか」日本教育音楽協会編昭和六年—十二年（春・夏・秋・冬）（秋・夏）新しい詩に曲がつけられ子どものよるこぶ歌曲が生まれました。「わゆうりうぶ」「こいのぼり」「あみじ」などは現在でも全国の多くの幼稚園・保育園で歌われています。（小学校が十六年には国民学校になり終戦後は再び小学校になりました）
- 「音楽リズム」は幼稚園のための指導書として文部省から昭和二十八年に出了ました。現在ではこれが一番新しい資料になっています。この中から歌唱ならびに器楽合奏に用いている曲をしらべてみましょう。
- 小学唱歌集初編（明治十四年）
  - 「わすんで ひらいで」
  - 「わらべうた

- 「かごめ」「わらいたひらいた」「ふらんこ」「くづがなる」
- 「かごめ」「わらいたひらいた」  
「水あそび」「お正月」
- 大正時代
- 「えほんしようか」（昭和六年）
  - 「わゆうりうぶ」「あみじ」と「こいのぼり」「たんぽば」「ひよこ」「金魚」「かみなりさま」「かけっこ」「遠足」「菊の花」「もみじ」「お正月」「自動車」「おさる」「雪」「豆まき」「あかちゃん」「ぎつこんぱうだん」「おどり」「こ」「ひなまつり」
- 児童唱歌
  - 「砂山」「わゆうちゅうねずみ」
  - その他
- 「お舟」「海」「郵便屋さん」「煙」「おもちゃのマーチ」
- 「桜」「汽車ぱつぱ」「とけい屋のとけい」「雨」「おうちの前」
- 歌詞も文語調から言文一致唱歌に変わり現在にきています。終戦後は民間で教科書を作った関係から新しい歌がぞくぞく生まれてきました。そしてテレビやラジオで毎日放送されるのでいつの間にか幼児はそれをまねてうたっています。

例 C・Mソングや鉄腕アトム、ウルトラセブンのうた等。

しかしこれらはいつまでもつづかないようです。

やはり児童には児童の長発達段階に応じた音域であり、歌詞であります。曲でなければなりません。こうしてその時代にあった歌が

歌われていくと思います。

明治のはじめ「わらべうた」や「民謡」はいわゆる俗楽として

学校唱歌には不適当と考えられていたようなので教材にはかげをひそめておりました。しかし子どもたちはお寺の庭や神社の境内で、また横町の露路などでいつまでも楽しく歌いあそんでいました。わらべうたはお母さんから、お母さんはそのままお母さんから歌いつがれてきたもので、いくらうたつても、あきることなくきょうもあしたもあさつてもうたいあそばれています。わらべうたは常に新しく創造性を培う歌あそびとして、最もよい歌曲だといえましょう。

幼稚園で現在歌っているわらべうたをしらべてみましたところ

一位 はないちもんめ 二位 かごめ 三位 あぶくたつた

四位 とおりやんせ 五位 竹の子一本、になつていました。

このたびは幼稚園のための教科書とそれに準じた資料をあつめ

てみました、つぎには児童の歌について述べてみたいと思います。

(日本体育大学)

#### 第四回みどり会夏季研修会について

本誌四月号で概略お知らせしましたが、お申込み方法など昨年と違うところもありますのでお間違いないよう、お早めにお申込み下さい。定員になりましたら期限内でも〆切らせていただきますのでご諒承下さいませ。

期日 八月十九日(月) 二十日(火) 二十一日(水)

場所 ホテル岡本 热海市上宿町一ー九

定員 三〇〇名

会費 一万二千円(宿泊料、食費とも)

内容 シンボジウムと分科会

① 周郷 博先生 ② 津守 真先生 ③ 外山滋比古先生

④ 大山次郎先生 ⑤ 本田和子先生 ⑥ 田口恒夫先生

⑦ 河辺 果先生

申込み 左の様式の申込書(一人一枚)に会費(現金または振替)をそえてお申込み下さい。六月一日より受付けます。お取消しは七月三十一日までにお願いいたします。その場合、宿泊料九、五〇〇円をお返しいたします。それ以後はお返しいたしませんが代人のご出席は認めます。(電話、はがきでのお申込みはお受けしません)

申込書

勤務園名		勤務園住所	
氏名		夏休中連絡先	
希望分科会	第一希望 ( )	第二希望 ( )	第三希望 ( )
会費	現金	振替	どちらかを消す
		tel	

宛先 東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内みどり会研究部  
振替番号 (東京 九九〇八五)

## 「幼児との教育」の中で学んだこと

河 辺 晴

### ・自己主張から思いやりへ

お互いにいかに自分というものを大事にしているかということは、これは皆さんでもそうだと思いますが、皆さんには、これら卒業なさって、同窓会や同級会などをやられると思います。あるいはもう、中学校、高等学校の同窓会などをやられたかと思いますが、そういう時に、かりにみんなで写真をおとりになつてね、その写真が送られてきた時に、おそらく誰の顔を一番に見るでしょうか。きっと自分の顔を一生懸命探すでしょう。他人の顔をひと通り見て、最後に自分のを見るのはおそらくない。自分がどのように写っているかと、まず最初に見るだらうと思うんですね。それほど自分と言ふものを、大事にしているわけです。

ところで子どもの遊びを見ておつても、まず自己を強く主張したり、自己を実現していくという、そういうものの非常な強さを感じます。でも反面さきに述べましたように、菜切り包丁を借りたいと思っている他人を一方でひしひしと感じているわけです。

から、それをも認めないわけにはいかない状況におかれます。

そしてこの他人の自己主張をも認めていくといふ。その認め方はさきほども言いましたように、たいへん下手くそですけれども、少しずつ認めようと努力していっている。そのアンバランスのバランスがとても大事なのじゃないかと思うんです。

幼児期が混沌とかマグマのようなドロドロとした時期だと言う。混沌とかドロドロの状況のひとつと考えてよいでしょう。またこういった過程を、「思いやりが育つていく」と言いかえてもよいでしょう。したがつて私はこの過程をもつと大事にしていきたいと思います。また時間をかけたいと思います。簡単に、「相手のことを考えてやりなさい」といった指導でこの思いやりが育つものでないことが子どもをもつとよく見ればわかつて来ます。さてこのような観点で子どもを見ていますとたとえば四歳のあら子どもが泣いていた時、「Mちゃん、どうしたの」と友だちが寄つて來るわけですね。

ところが寄つて いつた子がその子の手を握つたんです。「どうしたの」って。

そうしたらそばにいた子どもが「そんなことするとまた泣かはるで」と言つたんです。というのは、このMという子どもは少しでも触れられるとすぐ泣いてしまう、泣きっぽい子どもだったんですね。そのことをそばにいた子どもはよく見て知つていたわけで、その子どもに伝えているわけです。また違う子どもが、「どうしたの」とやってきて、「絵がかきたいの?」と言つたんです。どうやら、その子どもは絵がかきたくって、泣いたことがあるらしい。

次に出てきた子どもは「靴がなくても泣かんときや」って言うんです。皆、なにか自分が経験した所で、相手の泣いているのを受け止めている。だから幼稚園生活になれて来たころの四歳児の中には、このようないいやりの姿がみられます。

相手の気持ちをくんでいく姿の中にはこうした自分の経験からイメージがなにか働いているように思われ、このイメージにさえられた感情の表現ともいえましょう。

本当に気持ちをくんだと、相手を理解したとかそういう深い意味のあるものではないんですけども、私はこうした感情とイ

メージの表現のつみかさねによって、他人を思いやる経験がなされるのだと考えます。

またこれは指導の中で目標を抽象的、観念的にとらえて指導をあせつたり、また子どもの見方がかたよつたりして指導をあやまるようと思うのですが。

ある女の子二人が、ままごとのようなことをやつていたんですが、そこへ男の子が一人やってきました。その二人の女の子のうちの一人、Iという子は、その男の子Kが好きで、IはKと一緒に遊びたいわけです。Kがうろうろしていると、一緒に遊んでいるNに、「K君まぜてあげるか」とこう打診しているわけです。

「それにお父さんするって言わはるし」と、こういうふうに言つてるのですけれども、もちろんKはお父さんをするなんて少しも言つてないのですが、もしKが仲間に入つたら、お父さんの役割をしてもらえばいいのにという気持ち、自分の気持ちをあらわしたのだと思います。ところが一方のNは仲間に入ることはあまり好きじやないらしく、何かこう不服そうな表情をして、黙つています。そこでもう一べん重ねてIがNに「まぜてあげなあかんで。あほうなことしやはらせんし」と言いました。

このようなかかわりの場面に出くわしますと、私たちはつい、IはKに対して非常に思いやりのあることをいつたので、大へん

思いやりのある子ではないかというふうに見てしまうんですね。これはまあ、間違いとはいえないようと思うんですが、でも一方Nに対してはのちほどだんだん強引になつてきているわけです。はじめは「ませてあげるか」と聞いていたんですけれども、相手が返事をしないでいると「ませてあげなあかん」と非常に強引に言っている。だから特定の子どもに対しては、いわゆる思いやりがあつても、他方のある子どもに対しては、思いやりどころか自分の自己主張をものすごく強引に押しつけようとしているのが見られます。子どもの成長過程にはこういう面があるわけですが、これも未熟と言えると思いますが、こうした成長過程をも肯定した指導が必要でしょう。それを私たちがだれに対しても目標を高くかかげて指導しようとさせつたり、「ああ、Iっていう子はなんて思いやりがある子どもだらう」ということのみを見て、片一方のNに対しては強引に自己主張している側面があまり見えてこなかつたりするわけです。

このように「思いやりの心」を育てようとすれば、まずその子どもの姿をしっかりとみることから始めるべきでしょう。つまり見ていても見えている面と見えていない面があるわけです。これは両方とも四歳児ですけれども、年少の子どもに対する年長児のいろいろな思いやり方も見られます。

Nに対しても、年長の子どもはそれをよく知っています。ところが年少の子どもが一人で乗つていたら、一人の男の子が「二人乗りはあかんで」と言つたんですが、もう一人、肩を組んでいた男の子が、「そう言うても赤組は小さいから、いいやないか」と、そんなに固いこと言うなというふうに、向こうへ連れていくこうとしている場面がありました。小さい子どもだからお目にみてやらなくてはというような気持ちが動いたのだらうと思います。

きのう東京都立N幼稚園に私の知つてある先生がおられますので、その先生をたずねて幼稚園を見せてもらつたんです。ちょうど卒園式まで残る日が少なくなつて、自分たちが飼つてある動物を——小鳥たとか、うさぎだとか、それからりすだとか、いろいろな動物を年長組の子どもたちが飼つて——これを年少の子どもたちに申し送らなければいけない。どうしたらいいんだらうといううので困つていたらしいんですね。去年は卒園式の日に、バタバタと、これはこうして、これはこういうふうに餌をやつてというように、申し送つたらしいんですけれども、今年は早くか

ら、年長の子どもがそのことを気にしていたものだから、年少の

子どもを六人ずつですね。まあ向こうの先生は「でっちらぼうこ

う」と言ってたんですが、とにかく何か見習いに毎日年長組へ行くようにしたわけです。

朝、係の六人の子どもがやって来ると、年長の子どもはまず、

「ぼくたちとれがやりたいんだ」ということをきくんだそうです。 「りすがいるし、うさぎがいるし、それからインコがいるし、花の世話もあるし、キンカン鳥ですか、キンケイ鳥とかなんかいう鳥もいるし」と言って、六つほどのお仕事があることをまず知られて、「ぼくどれにする?」って言うと、「ぼく○○にする」と言う子どももあるそうですが、とくに女の子あたりはどれにしていいか迷ってしまうんだそうです。 そうすると、「君はこれが似合っている」ってね、顔つきなんか見てあてがいぶちをやるわけです。「君はそのりすがいいだらう」ってね。でもあとで、「それでいい?」って確かめるんだそうです。

こんな話を聞くと、年長児が年少児に対して非常に思いやりをもつて接するのだなと思いました。でも時々なかなか辛らつなところがあつて、「今日の年少のあの子たちは声が小さい」って年長児らしく言って、「声が小さけりや年長組になれないぞ」ともう帰ろうとしている時に忠告を与えるような場面もありまして、

こうして考えて見ると、年長と年少の関係についてもあらためて見なおす必要があるようと思われます。

特に年齢別の組編成も大事だけれども、そういうふうに、縦割りって言うんですか、三歳、四歳、五歳が、かりにいたら、そういう縦のかかわりを見られていくことは大切だなあと思うんです。モンテッソーリーの方式でやっている「子どもの家」といわれている所では、縦割り式の保育を開拓しているのを以前にみせてもらいましたが、そういう場合にはただし人数が限られておりまして、二十人以下で指導されていたよう記憶しています。

大津でもいろいろやつていきましたけれど、四歳、五歳でうまくいく時だと、同じ五歳でも一年保育で入つて来た五歳児と、二年、年長組五歳児とでは年齢は同じでありながらやはりがいがあって、二年目の子どもたちは、非常にリードしていくところがあります。でも入ったばかりの子は、なかなか慣れていくことがスムーズにいかなくてついていけない。二年目の子どもは新しく入つてきた子を仲間に入れようとするのだけれども、もう一步、入つて

たいへんほほえましい状況を見せてもらえたわけです。

#### ・年長と年少の関係

いけないということが、同じ五歳児でもあるわけです、ましてや五歳と四歳、五歳と三歳、というようになつてみると、その能力の開きが、劣等感や疎外感を与えて自信をもつてかかわりあつていくことができないでいることがあると思います。

それからもう一つこんなことがありました。先ほど、自分の経験から想像して、友だちの気持ちをくむということを申しあげましたけれど、ちょうど自転車に乗つておつて怪我をしたクラスの子どもが、帰りの時に友だち同士で話し合つてゐるわけなんです。

「今日、ぼくと遊ぼうね」って言つてゐるんです。「ぼくの所へ来るか」つてもう一人の子どもに聞いて、「そやけど、お母さんに友だちの家に行つてもいいからって言つてから来いよ」って言つてゐるわけです。そして「自転車はあかんで、歩いてやぞ」って言つてゐるのです。これは先生から言われ、お母さんからも言われていることで、そういう経験から友だちに對して遊びに来てほしいし、遊びたいし、しかもお母さんの言うことをよくきいてからでないとダメだ、ということをその相手に言つてゐるわけです。このような場面もたくさんあちこちに見られます。

それから五歳児でこんなことがありますね。

先ほど、一番初めに申しましたような感じる力が強いのにも関係してくるんですけども、女の子が三人いて「ここレストラン

にしようか」と一人の子が言つたんです。その後に、「コックさんは、誰がする、コックさん」といつたんですけども、あの女の子二人が「お姉さんしようね」「お姉さんしようね」と言つてるだけで、ちつとも、最初に提案した子どものコックさんをしようと言わないわけです、それをきいていたコックさんを提案していいた子どもが、その時ペッと変えまして、「こりゃうどんやさんにしてようか」って。そうしたら「そうしよう」「そうしよう」ということになつたのです。この「おうどんやさんをしようか」は、ツーと通じたんですけども、レストランと、コックさんは何も通じなかつたということです。でも私は、偉いと思つたんですけども、最初にレストランとコックさんを言つた子どもが、相手がそれを聞き入れないで、お姉さんしたいとか、お姉さんしようとか言つてるのをびんと受けて、そして、すぐぱつと、その子どもに合うような提案に変えていく所あたり。これは本当に全身で感じとつてるとも言えますし、自分の主張しながら相手のやりたいことに、自分を合わせて、いこうとすることができる子どもになつてゐると言えると思います。

まあ、もちろんこれは、年長の子どもですが、そういうのに敏感に応じていける、こういう子どもは鋭いと言えば鋭いと言えますけれども、私は敏感にそういうものに応じていけるような子ども

もに育つてほしいなと思います。また、そういうことのできる感  
受性というものは、常に教師自身が子どもとの対決のなかで感じ  
られるようになる時育つんじやないかと思うんです。

#### ・セルフコントロールは育てられるか

先ほどの話の中で、言い足りなかつたと思うことがもう一つあ  
るんで……。子どもが自分というものを表すことができるようになつて  
いく過程で、反面それがどのようにコントロールされるようにな  
るのかもう一つはつきりつかめていないのですが、「セルフコン  
トロール」ということは幼児教育の中で育てるひとつ目の目標のよ  
うにも考えられています。私もそういうものがどのように育つて  
いくのだろうかということについては常に関心をもつてゐる問題  
のひとつです。

ところである時、こういう場面が見られたのです。遊びを終え  
て保育室の中に入ってきた子どもたちが「おもしろかったね、あ  
したもしょうね」ということでわいわい言つて、何人かのグルー  
プが話し合っていたのです。

そこへA児が「何をしていたの、ぼくもませてくれ(ほしい  
な)」といつてきました。A児は日ごろ、いつでも一番先頭に立  
たないと承知ならない子どもなんです。が、その時、その遊びの

リーダー格であったY児が、「A君、一番下の兄さんするか」つ  
て言つて一番下の役割づけをしようとしたんです。ところがA児  
は、「一番させてくれ」と遠慮気味に言つたのです。そうしたら  
リーダー格のY児が、「K君が一番やな」といつて二番という役  
割は決つていてだと拒否したわけです。

その時、その隣にいたB児が「そらやA君、一番目のお兄さん  
を二人でしよう」つて言いました。するとA児はすかさず「お  
れ、一番あかん(だめの意味)やろうか」つて言つて、「お  
うA児の本音がでてしまつたわけです。しかし、いつもだつた  
ら、「おれ、一番でないとやらなーいぞ」などというような言い方  
をする子どもなんですが、「一番あかんやろか」つて、非常にひ  
かえめな発言になつたあたり、何か、「一番目は決まつてゐるから  
だめだと言わねながら、一方で隣のB児から「二人でやれば」と  
言われ、自分が何か少し受け容れられたということで、一番の役  
割をもつと強く要請したかったのに「あかんやろか」という非常  
にひかえめな表現になつたんじやないかと思うんです。

そうしたら、「明日は一番背の高いものを一番にしよう」とま  
た違つた提案をする子どもがでてきたり、また「一番上は大学や  
る、二番目は中学、それから三番目が小学校」などともいつて明  
日の遊びに期待をかけながらその話し合いは終りました。

この事例だけでどうこう言えないとも思はんですけれども、このような多くの事例で、こういった場面を見ていますと、他人から受け入れられると言うんですか、受容されたようなふん閑気の中では、自分というものを、日ごろ強く押し出すような傾向の子どもでも、何かひかえめな表現をしてくる。他人に自分が受け入れられるというふん閑気を感じた時というのは、自分を無理に押さえるんじやなくて（自己受容といつてもよいかもしません）何か自然に少しほしーしたような、そういう状況が見られるわけです。これをすぐにセルフコントロールしたと言うふうにはいえないかもしませんが、けれどもこののような自己主義を自然と若干セーブするといいますか、あるいは、自己主張と他人への思いやりのバランスといいますか、こうした態度が他から受容されるというふん閑気の中において多く生まれるという仮説を私は立てているわけです。

このようなこと、つまり「この子どもたちにもこんな面もあるのか」というように日ごろなかなかつかめないでいるものが、子どもとの接触の中で少しづつ見えてくるような感じがしておりますして、この見えなかつたものが少しづつ見えてくるような体験が現場で子どもに接せられるときに非常に大事なんじやないかと思ひます。

#### ・子どものイメージ・アイデアの養成者・協力者になる

わってたんですけれども、よくお遊戯会という名のもとに三学期にもたれるわけです。そういう中で「劇遊び」というのがあるのをご存知と思います。そして「てぶくろ」という、ウタライナの民話がよく劇あそびとして子どもたちにもたいへん喜ばれ、劇的に表現されます。ひとつ手袋を、蛙だとかねずみとかが、つぎつぎとみつけて「誰かはいっていますか。私もその中に入れてちようだい」というようにつきつぎと小動物がやって来る物語で、いわゆる繰り返しのおもしろさもあって、みつけたひとつのお話です。

それをある幼稚園で、子どもたちが「やりたい」ということになって、その手袋を作りたいといったわけです。ところがその時先生の頭にひらめいたものは、劇遊びの大道具としての手袋をつくるのですから、たいていボール箱を立ててそれに穴を開けて入っていけるように扉をつけて「とんとん誰かいませんか」とやれるようなものをつくればよいのですから、うしろの方には積木でも積んでおいて、その積木のところにこのボール紙をはれば、これでちょっと劇遊びの大道具はできあがりになるわけで

す。このような大道具としての手袋のイメージが先生にあったのでしょう。先生は

「手袋を作りたいなら、遊戯室に大きな積木があるでしょ。あそこに行つて作つたらいわよ」といったそうです。ところが、子どもたちが、やにわに「そんな積木で手袋は作りたくないんで本当に大きな手袋を作りたいんや」とこう言つたそうです。このことをきいたとき私は、子どもらしいイメージだし、よいアイデアだなと思いました。

多くの先生の中には、「そんなみんなの入れるような大きな手袋は材料などから考えてとつてもできっこない」と考えるでしょう。でもその先生は偉かったです。「そんな大きなきれはないわよ」とすぐに言わなかつたようです。おそらく先生もどうしようかなと思つたんだでしょう。そうしたら子どもたちが、さつとそのへんを探しに歩いたんです。

ちょうどお遊戯室の片すみに保護者の人たちが何かしようとして布をたくさん持つてきておいたんだそうです。子どもたちがこれを見つけて「先生、あのきれで手袋が作れる」と言うんですね。「あのきれ貸してもらいたい」という申し入れがあつて、その結果相談ができるしそれを作るということになつていてるんだとききました。

その時に私は、日ごろ、そういう問題から感じていたんですけども、私たちとは、何かを作りたい、あるいはやりたいという時れども、一つの意欲と言うんですか、違つた言葉で言えば、何とかこれまで作らなきゃならないという切迫感と言つていいですか、そういうものが一つあって、そのためにはどうしたらいいかと、いろんな知識というものが動員されてくるんだと思います。そこではじめて、知恵が生まれてくるんだと私は思つてます。ところがいくらいいイメージだとか、いいアイデアがでてきても、知恵ができても、それがものになつていかなきゃだめなんです。そのものになるためには、今の手袋のところで、先生には、もうちょっと、ものになる何かがあつたらいいなあと、いう感じがしたんです。たとえば、「それはおもしろいじゃない」と、もし言ついたら、もつと子どもたちはそのことを一生懸命になつて考え方よとしただらうと思うのです。

この手袋のことから私は以前に、今ヒマラヤに行っておられますが（これは講義した当時のこと）はじめての南極の越冬隊長をやつた西堀栄三郎さんからいろいろのお話をおききましたことがありますけれども、その西堀さんの体験を連想いたしました。西堀さんが経験された南極生活では隊員が少ないのでひとりの者がいくつも役割を持たないと生活がなりたたないのでそうです。と

ところで発電機を操作するためには発電係というひとがいるのですが、南極に基地をつくった最初、ドラムかんに入った石油のいくらかある分量だけを発電機のある建物の近くまで運んでおいたらしいんです。ところが建物のそばまで運んでおいても中まで運ばなければいけないのでその発電係の人は、もう一つ風呂の世話係もやつておられたようで、お風呂に入りに来る隊員の背中を洗つてあげることによつて「明日すまんけど、ドラムかんの石油を運ばなければならんから一つ手伝つてくれ」と言うことで、ずいぶん氣を使いながら運んでもらつたりしてたそです。

いよいよその家のまわりに運んであつたドラムかんの石油が無くなつてきて、今度は遠く何キロか相当離れた所からドラムかんを運ばなければいけないということになつてくると、お風呂で背中を洗つてあげることぐらいじゃ、どうも運んでこれらそういうの。そこで、ふつと思つたアソデアが「あの残りのドラムかんの置いてある所からこの建物の所まで、パイプがあつたらいいな」ということだつたそです。

さつそく隊員の皆に「あそこからここまでドラムかんの石油を運ぶのに、パイプがあつたらいいなあとぼくは思つんだけれども……」と言つたら「馬鹿な、そんな夢みたいなことを言ひなさんな。パイプのかけらもないようなこんな所でパイプなどとばか

げたことを考えなさるな」ともうみそくそに言われたらしいんです。

ところがその時西堀さんだけは「おもしろいじゃないか」つて横から口をはさんだそです。「おもしろい考え方だ」と言われて、その人は、皆からけなされてもうだめだと思い込んでいたのになかつ一度そこで考えなければいけないようになつたわけ

です。ところがまた隊員の人たちが「西堀さん、いくらあんたが器用だつていつたつて、こんな所でパイプができるわけはないし……」と言つたら西堀さんは「氷があるじゃないか」とまあこう言つたそです。まあそれはまさかせで言つたんだそですが

れども、「あなた、いくら器用だつて、氷に穴をあけて、何年がかりでパイプをつくるんだ」とまた冷やかされて、しまいには「氷でパイプを作つたつて、すぐ折れちゃうじゃないか」と。

そこで「折れない氷を作ればいいんでしょ」つて、売り言葉に買ひ言葉といったわけで、いよいよそれを考えなければいけないようになつてしまつて「じゃあ、折れないように作ろうと思えば氷の中に何か芯を入れればいい、何か芯になるようなものだつたらボロ布でもいいや」と言つたら、保健係の人が「怪我をするといけないというので包帯がたくさんあるんだけれども、誰も怪我をしないので、包帯ならたくさんある」という。「よしそ

れだ」というわけで、一メートル足らずのしんちゅうの棒があつたので、それに包帯を巻いて、水をじゅつとかけるとすぐみごとに凍つてそのしんちゅうの棒が筒になつたんでしょうね。そこにお湯をジャーと入れると、筒がすぱっと抜けちゃつて、みるとるうちに多くの管が生産されていったらしいんです。その管と管の間に睡(?)をつけようと、ぱっとくつくんだそうです。そしてとうとうその夢が実現したそうです。で石油は油ですからね。水と油で、氷の管の中をさあっと石油が通つてくるわけです。成せば成るという言葉があるけれども「本当にこんなことができるだらうか」ということがとうとうものになつていって、だんだん協力者がふえてきたんだそうです。「ぼくも手伝う」ということで初めはそんなんかな、夢みたいと言つて、ほとんどの人が反対の側に立つていたのが、いつの間にか、皆賛成の側に立つていた。

こうしたことから、ものになるためには、それを育てる周りの人たちが必要だということを西堀さんはいつていたのですけれども、ちょうど手袋の話をきいた時に私はこの話をふつと思ひ出しました。子どもがとてつもないイメージを出した時に「あつそれはおもしろい」「それはいい考え方だ」というように、先生が子どもたちの味方になつてやる。できないかもわからない。あるいは

せんせんそういう材料がないかもわからないけれども、一緒になつて考へていける先生の姿勢……。  
そこでもたつくかもわからないし、それが三日も四日もかかるかもわからないけれど、そういうことどいうのは、私はたいへん大事なことだと思うのです。またこれが「育て心」なのかもわからりませんね。

でも一番初めの意欲、やろうという意欲がなければダメですしそれに知識というものがある程度結びついてこなければ……。

おそらくここでは、知恵にはならなかつたと思うんです。それはその、ドラムかんを運ぶのではなく、石油を運んだらという知識だと思うんです。ものの本質みたいなものが、ふつとひらめくことが大事なんで、そのことが出てきて、初めて知恵になつていく。ただ知恵がでたり、アイデアがでたり、いい考えがでても、

それがものになるためには、反対者が、足をひっぱる者があつたんじやだめなんですね。少なくとも先生は、幼児たちが考えや、アイデアや、知恵を出してきた所で、他の子どもは協力しなくては、先生だけは、ひとりひとりの子どもの出した、知恵なり、アイデアに対し、ものになるよう、「それはおもしろい」とか、「それはいい考え方だ」と言うように言ってやれる先生になる

ことがとても大事なんだろうと思ひます。

#### ・おわりに—まとめ—

以上、自分の心に残るものと/orいことでいくつか申し上げてきましたけれど、まあこれらのことを通して考えられるものといふものは……一般には教育と言うと、これこれを経験させなければとか、そのためにはこのような活動をこのようにさせればというように計画的、意図的具体的などといつてのぞましい経験内容をキチッと組織立てた単元活動と呼ばれているものを考え、(今でもそういうことをやっている幼稚園もたくさんあると思うんですけど)たとえば「乗り物ごっこ」一つ取り上げてみましても、そうだと思うんですね。乗り物という社会的な事象というものを、経験的にわからせたいというところで、乗り物ごっこを引き出していくわけなんでしょうけれども、その中で、乗り物には、機関士とか運転手とよばれているいわゆる列車を動かす役割の人もあれば、乗客の面倒を見る車掌さんのような役割の人もいるし、それから、それぞれの町から乗り物に乗る時は、駅といふものがあつて、そこには、駅長さんとか駅員などの人がいて、切符などを売っている人があるんだということ、すなわち、いわゆる社会事象といふものを子どもたちに経験的にわからせよ

うと、それらの経験内容を仕組んだわけですね。でも私たちがよく考えてみると、こういう一般的なぞましい経験内容をみんなに一齐に経験させたことよりも、こんな子どもがこんなふうになつて、育つていったという、ペーソナリティーの成長と言いますか、人格の成長というような点が、どれだけそういう経験の中で起つているかということについては、今までもまた、今もなおあまり問題にしていなかつたし、またしていいのではないかと思ひます。また、口では言つているがそのところの事実をみていないのではないかと思ひます。こういう知識がわかつたとか、こういう技術が身についたとか、こういう能力が育つたとかいうことは言えて、たとえば、お母さんから離れられなかつた子どもが、だんだん離れられるようになつていった。非常に傍観をしていて、じつとしていた子どもが、活発に動けるようになつてきました。とにかくぶらぶらしていて、どうにか動けたけれども、その子どもが、非常に生き生きと動けるようになつてきた。全然絵もかかないし、砂でも遊ばないし、積木もやらない子どもが、なにかの手段で、どうにか自分というものを表現するようになつてきました。あるいは表現の仕方に少々のかたよりはみられるがいろいろ工夫しているなものを作り出すことができるようになつてきて、そして、そこに個性的な表現がみられるようになつってきた。

など。このような自発性であるとか、独自性とかあるいは社会性であるとか創造性であるとか、このような面が前よりどのように変わったのかと言う、人間の成長ということについてはあまりしつかりとは見つめてこなかったように思います。私の考える教育観では、もはや教材中心の教育観から、人間中心の教育観の方へ移行しなければいけないと思うんです。（決して教材を無視軽視したりすることをさすのではありません）教材の経験もさることながら、その根本に人間的な成長というものをしっかりとおまえておかないと、いくら社会事象がわかつたり、社会の現象について理解したとしても、それは何か大事なものを育てないでしまってことになるんじゃないかということを、強く思うわけです。

そこでこういった点を考えてみると、幼児の自発性、本当に

のぞから発する自発性というような、そういうものを育て、そして僕に持っている経験だとか、知識だとかいうものが、その中で働いて、子どもなりによりよい価値を見いだしていこうとする。見いだすだけじゃなくて新しい価値をみつけそれを作りだそうとする創造的な態度にまで、高まっていくことが、とても大事だと思います。幼児たちは遊び（生活）の中でこれをどしどしおしすすめています。すなわち、先にも例に出しました。

したように、自己を実現しながら、自分の感じたことや、思ったこと、考えたことを自分だけでも、他人とかかわりながらでも現実化しながら、その中で他人に対する思いやりを持つていくような、すなわち、他人を受け入れていくような、そういう両面の、バランスのとれた子どもというものが、きわめて自然に無理なく育っていくことについてどれほど、教育の中で考えているだろうか。また言うだけでなくその事実をはつきりとみつめていくといふことを、私はこの六年間問題にしてきましたし、このことが幼稚園教育の中ではとてもとても大事なんだなあとということを知らされてきたひとりなんです。そしてそのためには、幼児と共に教師も成長していかなければこのことが現実化していかないということをいわよどいしらされてきています。こういうことが皆さんに伝えたい一つでした。

もうこのことが解決してしまっておれば、幼稚園教育については、もうやめてもいいと思うんですけども、まだまだ不充分で、未解決のままに終わっているのですから、心残りを感じますし、もう一度幼児たちと生活とともにしながら、こういうことをさらに確かめていきたいなあと思っていますのが、今の自分の

“いれて” “いいよ”

## を考える

### —子どもの遊びへの入り方—



## 石川 章子

四歳児入園当初、もちろんひとり遊びが多いが、近所の友だち同志で“かごめ”や、つみ木遊びをやっている子どもたちもいる。そんな時、教師は手の離せない子どもをひきつれて「入れて」と言う。ほとんど「いいよ」という返事が返ってくる。こういうことをくり返していく。  
「あそんでいるところに自分も参加したい時には『入れて』と言えばいいんだな」とおぼえていくと思う。そしてはじめはたいてい「いいよ」と返事が返ってくる。しかしこういうこともあると思う。自分のやりたいことがみつからず、「みんなの中にはいつてしまえば何かあそべるのではないか」という期待をもって、つみ木で基地をつくつている友だちのところへ行つて「入れて」と言つてみる。  
「いいよ」とやつている子どもたちは言う。その子どもは承諾を得てその遊びの仲間入りをした訳だが、何をつくつてているのかわからない。何をすればいいのかもわからな  
い。はじめからやつてている子どもたちも「いいよ」とは言ったが何をどうすればいいのか、どう協力してほしいのか、もちろん言わない。そこでその子どもは勝手につみ木を運んで適当につなげる。すると仲間から「ちがうよ、そこへおくなよ」と言われシヨンとしてしまう。そしてぬけ

ていい。仲間はおかまいないし、まったく無責任に「いいよ」と言つただけである。教師はどうあそびにはいればいかわかるが、子どもはそらはいかない。

こういうこともあった。五、六人、絵をかいている子どもたちがいた。別に同じ絵をかいていたわけでもなく、ただ何となくそこに集まっていたのであるが、紙とクレヨンを持って来た子どもがその集団に向かって「いれて」と言ったのである。絵をかいていた子どもたちも「いいよ」というのである。その子どもは、そこにすわって絵を書き始めた。教師が直接、間接的に教えたこの「いれて」「いいよ」が何ともかけいな感じがしたのである。

二学期になると少しづがつできている。子ども同志で、やつてること、やりたいことがわかつてくる。  
つみ木あそびで「いれて」「いいよ」が前と同じようにやりとりされていた。勝手に並ぶ。すると「だめだよ、そこへおくなよ」の次に、「こうちへおいてよ」がつながる。また「だめだよ、そこへおくなよ」と言われて「じやあどこへおくの?」と聞くことでもできるようになつてゐる。この「次のひとこと」で、その子どもと初めからやつ

ていた子どもたちは、スーッとつながつてしまふ。完全な仲間になつてしまふ。大人の中には「いれて」に対しても「いいよ」と言つてだれでも仲間にしてあげるのが「いや」「だめ」と言えることも大切だと思う。これが言えるということは、「自分たちであそんでいる」という意識がはつきりしていることでもあると思う。ただ、断わられた子どもが、どうしてもその仲間になりたい時はどうしたらいいかが問題だと思う。教師が「いれてあげてよ」と言うことはできるだけ避けたいと思っているのだが……。

あそびへのはいり方がいつも「いれて」「いいよ」でなくなる。直接的に「いれて」と言わないで自然に仲間にはいれるように、自分なりにくふうする。たとえば、おうちごっこをしているところへ絵本を投げ入れて「しんぶーん」と言つて走つて帰つてくる。そしてようすを見ている。またしばらくして「しんぶーん」と持つて行く。うちにいた子どもが「わたしにもちょうだい」と言うと、何冊も何回も持つて行く。これでこの子どもはおうちごっこに新聞配達として仲間入りをしてしまつたのである。また、

あそんでいる側の子どもたちにも、友だちを受け入れることができるようになつてゐる。おうちごっこにはいりたいのだが、「いれて」が言えなくて家のそばに立つてゐる子どもがいた。その子どもに対して「おみやげ持つてくるなら入れてあげるわよ」という受け入れ方をするのである。何をすればいいのか、役を与えてもらえばどんなにかあそびにはいりやすいだろう。砂場であそんでいる時にも「いれて」と来た子どもに対しても「いいよ、じゃあおみすくんできて」と何をすればいいのか指示をしている子どもがいた。私まで「はいりたいな」と思つていた子どもと同じよううにうれしくなつてしまつた。砂場でのおみそ屋さんにはいる時、「ここのお店の入口はどこですか」と聞く。そんなものははじめからなかつたのであるが、お店の子どもは「え? じゃあここなの」と石で線を引く。そこからあらためて「いりあそぶださー」とはいつていくのである。お店としても広がっていくわけである。

このように、子どもは意識しているのか、無意識のうちに行動にできるのかよくわからないが、何とかあそびにはいろいろと方法を考えている子どもや、うまく受け入れてあ

げられる子どもをみると、「子どもってえらいな」と感じてしまう。しかしもしかしたら本当にそのあそびにはいたいのならば、勇気はあるが、「いれて」と言う方が素直に自分の気持ちを表わしているのではないか、とも考えられる。また不用意に「いれてもらえば?」と子どもに声をかけてしまうことがあるが、その時「ううううん」と首を横に振る子どもの気持ちはどうなのだろう。明らかにはいたそうな顔をしているのに、はいり方がわからないのか、見ているだけでいいのか、あそびはおもしろそうだが、自分に合いそうもない友だちだと思っているのか。

「いれて」「いいよ」ではないあそびへのはいり方、そして子どもの気持ちというものをもつとこまかに見ていきたいと思う。

(中央区立京橋幼稚園)

# 私 の 保 育

## 大 多 和 檀

「私の保育」とは一体どんなものだろう。私は、「保育」もしな

がら六年と十ヵ月たち、現に「私の」保育を受けた子どもたちが

○○人といふのですから「私の保育」、そんなものないわ」では

すまされませんが、「では、あなたはどのように指導し、やって

いるのですか」と聞かれた時に

「えーと、あのお、だんだんとこうなつてきたので……」

「だんだんってどんなふうにですか」

「気づいたらなつてたんですね」

というのが多く私の保育のようです。

そのためにはどのような手立てを考えたのか、まだだんだんとなつていった、その「だんだん」をはつきりさせる必要性をすぐ

く感じていますが、ここでは「私の保育」の一つの構成部分であ

る、私の「保育観」みたいなことを話したいと思います。——「私

の保育」は、(実際の指導の手立て) + (保育観) + (自分の性

格) + 保育観の中にも含まれますが、もっと実際の行動の時に表わ

れるようす)から成り立っていると思うので――

七年前、幼稚園の先生になろうと決心したのは、私にとってこ

の仕事は、子どもたちと遊んでいると、生きていくうえで一番基

礎的な大事なこと一人間と人間の関係についてーが学べる、とい

うところでした。

それで、幼稚園とは、教師と子ども、子どもと子どもの、一緒にいて楽しいという人間関係をつくっていく、教師も子どもも自由でのびのびとー自分は自分らしくその場の現実をよく見て行動ができるーしてみたい、と考えていました。

「自由」とはどういうことだろう。「眞の自由」とは、とよく考えさせられた時期です。自分は自分らしく、その場の現実をよく見て行動するということは、自分のことばで物を考える、ということだとと思うし、子どもたちより、大人がもっとと自分のことばで物を考えたら、子どもたちの前を歩く大人になつたらそれでもういいとすら感じます。

——最近「アラバマ物語」を読んですっかりこの本が気に入つてしましました。それは、お父さんがちゃんと、お父さんとして生きているんです。このお父さんは「アティカス」といいますが、

アティカスがある事件で、黒人の弁護することになると、子どもたちが学校でいわれるのです。「君のお父さんはニグロの弁護なんかしているんだぞ」そしてその子どもはお父さんに聞くのです。「なぜそんなことをするのか」と。アティカスはいいます。

「第一もし、私がそれをしなければ、私は大きな顔をして町を歩けないんだ。……（略）お前やジエムにむかって、二度とこんなことやつちやいけないなんておしえる資格もなくなるんだ」

「一度と再び、私のいうことを聞きなさい。なんてお前に口はばつたいたことをいえないじやないか」

そうだ。そななんだといふ氣持ちがどんなに私の中に広がったことか……。

私の好きな「おやすみなさいフランシス」や「ふくろ小路一番地」、「インガルス一家物語」にも、そんな大人が出てきます。——けれどもこのことは決して「楽しい」ことではないし、その前には、他の人も自分と同じに思つてゐるというか、自他の区別のついていない段階では、当然いろんなぶつかり合いも起つてくるし、まだしどし起つてくることを望みます。（そこから

次へと進んでいくのですから）それで「楽しい人間関係をつくる」の「楽しい」は抜きました。

今は、「関係的に存在している」ことを学ぶ場としてとらえ、これは遊び（＝生活）を通して、その中で

・子ども自身が、○○したいということが出せること（教師は、その子どもが本当にやりたいことは実現させたい）  
・ほかにもいろいろ、○○したいと思っている人がいることを知つていく

・そのちがつてゐる人たちと一つのことをやりとげることができる（つまり、

何かを好きになる

自分の目で見て、考えて行動できる

人間像

他の人のことも考えることができる  
をえがいています。

このことは私自身にも課せられたことで、幼稚園というワクの中だけでなく、大げさに言えば生き方についての自分の考えでもありますから、当然、私自身はどうなのかということが問われてきますし、そうなると生き方の一つの大きな価値感があり（ある意味では一つの大きな価値感があることは大事なことだけど）それのみが当然の生き方であり、その面からのみ人間を見ていいく

の世の中では、いとく、とはいがなくても、何をするにも現実の拒否にあい、このことは、そこで「なぜか」と考えさせはするけど、この連続ということはやっぱり「ああ、しんど」……したがって私の保育とは、「ああ、しんど」になってしまい、一時は、もうやめよう、他の仕事に変わってしまえ、とよく職業欄をながめていた時もありました。でもなぜだか今は、保育の場では「自由にのびのび」としている私なのです。

一体どうしてなのか、と思うと、「では私自身はどうなのか」という発想ではなく、自分のことばで物を考え、つまりあるがまま、私は私としてやるしかない、と「開き直った」からかもしがれません。ちょうど、子どもの友十月号の「やっぱりおおかみ」の終りの方の場面で、「やっぱりおれは、おおかみとして生きるしかないんだ。なぜかそう思つたらふしきにゆかいな気持ちになつてしまつた」に近い気持ちなのかもしません。私は私としてやるしかない、が「私の保育」なら、私としてやる保育とはどういう保育なのか、結局、うまく言語化できなかつたみたいですね。

「私の保育」は幼稚園にいらして見てください、になつてしまいそうです。要するに、このような保育観をもちながら、そして全くまだよく整理されていないのですが、「生活を通して」の生活とは、

欄をながめていた時もありました。でもなぜだか今は、保育の場では「自由にのびのび」としている私なのです。

一時は、もうやめよう、他の仕事に変わってしまえ、とよく職業欄をながめていた時もありました。でもなぜだか今は、保育の場では「自由にのびのび」としている私なのです。

- 生活とは生きること
- ⇒ ● 体を動かす
- 遊ぶこと
- 音楽が体の中にある
- 遊びに必要なものを作り出す
- 絵が体の中にある
- 他の人と話ををする、話を聞く
- 遊びを創り出す
- ことば

⇒ 一人ではなく ことば以外で (感じとる)

友達といっしょで  
約束ごとが生じる (仕事)

動物と遊ぶ→動物の世話

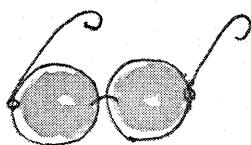
食事を、おやつをたべる→したく  
そうじ・片づけ

とこのようなイメージをもちながら、実際には、多分に無計画で、偶発的で、この四、五歳の時には何を育てたらしいのか、何が大事なのか、子どもたちと生活しているのが「私の保育」のようで、大したことなんか、とわからないだけの問題をかかえ、自分をさらけ出して子どもたちと生活しているのが「私の保育」のようで、終りに、「保育」からは離れますか、「私」を知つていただくなために、もう一つ、好きな本、として「ソロモンの指輪」—コン

ラート・コレントーを紹介します。

(港区立中之町幼稚園)

# 私 の 保 育



## 井 上 紀 枝

一九七四年二月 私のある朝

『イノウエつたらー』

『……（無言のまま腕ぐみをする）』

『あの、イノウエセンセー』

『なーに』

『じでんしゃのつていい？』

『小学校の体操の人がいなかつたらいいよ、アッ、たいぢやん、べんとう出したた？』（暖飯器で暖めるため）

『いけね、わすれた』

『はら、まだ』

『走っていくたいぢやんのお尻をバチン。

「ムツ？」（イノウエなんて、なれなれしいな、おかあさんたちいないからいいけど……ちょっとばかりあたりをキヨロキヨロみまわして、おもむろに呼び声の主の方へ近づく。）

『おはよう、ヤツちやん』  
『メガネゴリラおはよう』  
『なんだ、なんだ』

ヤツちやんのほっぺをつつく。ライダー・キックでとびかか  
るヤツちやん。

『ヒヤー まいった。こうさん、こうさん』

『おーい、イノウエー』遠くから呼ぶ声。

『せんせ、せんせ、せんせ』  
『あ、あけみちゃんおはよう』

『せんせ、画用紙使っていい?』

「いいよ、いつものところ。あつ、ないね、引き出しから出していいよ」

『せんせー、外へいってきまーす』

「どーぞ」

『せんせー、サッカーしよう』

「お仕事すんでからすぐいくから、先に友だち集めて始めててよ」

『せんせー。たけひさ来てない?』

「まだよ。あの子おそいから。あつ、來たよ、ホラ」

『のりえちゃん、あそびましょ』

『びっくりしたへへへ』

『はへへへ……』

あちらにひと声、こちらにウインク。保育室から遊戯室、

玄関へとドタバタ走り回つて、朝の三十分はあつという間に

すぎていく。年少組の三学期ともなると、ほとんどの子が、

カバンを置くのもどかしく、友だちを呼び合い、遊びに入

っていく。その日のおもな活動の予定時刻まで、私もあちこちに顔を出す。

たかちんがコマを持っている。

「あつ、ほんとのコマ、きみまわせるの?」

『あつたりめえだ、みてろ』

すばやい手つきでヒモをまく。

『どいてる』

サッとコマをなげて、あつ、ぶつかると思つた瞬間、ヒモはぐびのようにシニャッと先端を丸めて、コマを引き戻す、

と、コマは床の上でフラリともしないでまわっている。私も含めてまわりをとり囲んでいた数人の子は声も出ない。一、一秒の沈黙の後、

『やるー、たかひろ、すごい。先生にもやらせてよ』

『せんせーなんかにできないよ』

『やつてみなくちゃわかんないよ、早くやらせて』

コマをひつたくるようにしてヒモをまき始める。ところが

円錐形の斜面の上をヒモはすぐにすべりおちてしまつた。

『ほら、みろ、こうすんだよ』

『おかしいな』

イノウエジャイアントができることがわかると、たかひ

ろは意氣揚々、じらしにかかる。

『ほら、いいか、こうやって、上が巻きついてないとダメだ

ぞ』

『いいからかしてよ』

『小指にこうすんだぞ』

『わかったよ、早く』

『それ』

「それ」ヒモはもつれてコマは無残に放り出される。

『バカー、コマなげて、ひも引くんだよ』

「なげてひくか、うん、それはうまい教え方だ、たかひろ、もう一回」

どうにか回る。たかひろは大きな生徒が意外に早く回したのでちょっとと変な顔をしたが、すぐにいろいろとケチをつけ始めた。この場はたてまつるに限る。何しろ、たかひろのシンクにはまだとうていかなわないから。

「たか坊はコマの先生だ、大きい組になつたら、みんなこのコマ買ってもらって、たか坊に教えてもらおうよ」

『そうだね』(まわりの子、口々に)

たかひろは大得意

『ウヒヒヒヒ、おれ、にいちゃんに教えてもらつたんだ。あしたキゴマ持ってきて見せてやるよ』

## 三年目と六年目

少々乱暴な言葉づかいのこれらのやりとりは、多くの保育室ではほとんど聞かれないと思う。父母会の席上『このごろことば使いが悪くて、友だちを呼びすてにして困ります』などと言われると私は少々笑つてこまかしながら「実は私がかなり悪いので……」と言うことにしているが、初めの三年間ぐらいはこんなにひどくはなかつた。四年目に入つて二回目の年少児を受け持つたあたりから、何となく、自分のペースとやり方が身につき始め、それが言葉のやりとりの中にも現われ出した。サッカーなどをしてこちらも夢中で走っているときなど特にひどい。

「ヒデ、もっと前、あつ、横、ソレッ、あつダメだ。オーライ、いくよ」

元来早口なのが、それこそ機関銃のようにことばがとび出ずから、子どもははじめはキヨトンとしているが、二年間もつきあつていると教師と同じベースになる。年長組ともなれば、口からつばをとばしてやりあうことにもなる。もう少しゆつたりとやらなければと思っているうちに六年目に入つてしまつた。

港区の公立幼稚園に来て六年、この間私には保育の上で大きく二つの節があつた。最初の二年間は保育という仕事に慣

れるだけで精一杯だった。一年目に園独自の教育課程づくりが始まり、わからないながらもそれにむしゃぶりついていった。三年目、内容的に一つ目の転期が来た。この年、園全体で公開保育をすることになって、幼児期の音楽教育としてわらべうたをとりあげることになった。私はある研究会に入り、個人的にも勉強を続ける中で、わらべうたと幼児期の音楽教育というものに少しずつかかわっていった。その中で、子どもの見方や発達に合った教育内容や教育方法とは何かを学んだ。そして遊びを通して、すべての子どもたちがうたうことの楽しさ、すばらしさを知つていく姿を目あたりに見て、ひとりひとりの子どもの持つ可能性が本当に具体的に切り聞かれていくとはどういうことなのかを教えられた。これらのこととは、その後音楽だけではなくほかの多くの領域問題を考えるときの基本となつた。

四年目、五年目と、園の教育課程づくりは積み上げられ、私の新しい課題もふえた。その間ずっと私を悩まし続けたものはひとりの教師の手には余りすぎる四十名という子どもたちの数だった。四十名という数の中で個々の子どもたちの関係をどう結びつけながらクラスとしてまとまった集団にしていくのか、のびのびとしてはいるが、自分の力をまだまだ完

全には出しきっていない子どもたちに何をどうしたらいいのか。

六年目、私はまた年少児を受けもつて、わらべうたの遊びをしながら、やつと一つのことに気がついた。子どもたちだけで輪を作つて、『あぶくたつた』などを遊ぶとき、十二、三人だと、輪がほどよく保たれ、握った手の間の緊張感も快適なこと、十五、六人を過ぎるとあっちがはみ出し、こっちが切れして遊びもスムーズに運ばないこと、ほどよい人数のときは、お互いの声をよく聞けるし、声をそろえることのころよさもわかること、などなど。

今まで私は自主的に考え方判断し、行動できる子どもと子どもの集団を目標にして、簡単に口にしていたが、そこにいくには子ども自身が自分とみんなとの関係を把握でき、心をゆき届かせられるような集団の人数がなければならない。わらべうたに限らず、子どもたちがいろいろなものを経験してそれをもとに思考し行動するためには、四十という数は彼ら自身に把握できるものではないし、負担が大きすぎる。おとな四十名の集団を考えてみても、その中で同じ目標をもら、討論を起こしていくことはなみたいていではない。まして幼児にそれを強いているのだから事は重大だ。

私は一クラス四十名という数を今まででは教師の側から見ていたのだが、それが教育の場で、子どもにとつてどんなものだったか、なぜ四十名ではいけないのかが、実感としてわかつた。

しかし、実際は私の眼の前には毎日四十名の子どもがいる。私の目標を子どもたち自身の目標にするために具体的なわかりやすい内容と方法を差し出さなければならない。私はわらべうたをするとき二十名ずつ交代で時間をずらして二度やる。他の活動のときも内容に応じてできる限りそのような方法をとる。だが根本的なことは人数を少なくすることだ。

### 保育と組合運動

一クラスの児童数を現行よりも少なくしてほしい。（もちろんその分学級数をふやしたり、園数をふやしたりして）というのが私の切実な要求になり、同時にそれを要求するのが教師としての責任であると痛感したとき、ひとりの力ではあまりに弱いことに気がついた。私が組合に入つてからの年数は保育歴とほぼ同様だが、そこで得たことは、自分たちの要求は自分たちが動かなければ（主体的・自覚的に）解決しないこと、仲間と語り合い学び合うことのすばらしさだつた。

私はよい職場と仲間に恵まれた。そこは私の支えのひとつになっている。毎年々々私の課題はふえる。今まで考えてきたことは私の保育者としての六年間のほんの一部で、これからやりたいことやらなければならないことは山ほどある。たとえば、教師の数があまりに少なく過重労働になることからまわりの仲間が（全般的・全国的にそうだらう）バタバタと倒れたりやめたりしていること、結婚して子どもができるから働き続けるための保育所や適当な住居がないこと、お母さんたちと一緒に本当のP.T.A活動とは何かを考えたいこと、小学校の先生たちとともに教育内容のこと話し合いたいこと。保育園との関連を考えたいこと、クラス集団づくりにもつきめ細かくとりくみたいこと、保育室をもつときれいにすること（！）などなど。あまりやることが多すぎてまた走り出しそうだから子どもたちの忠告に耳を傾けよう。

『せんせー、あわてんぼうとおこりんぼを直してください』

（港区立南山幼稚園）

# 知恵おくれの子どもたち

## —この一年をふり返って—



鍋 嶋 美 春

私は以前中学校で精神薄弱児学級の担任をしたことがあります  
が、その後肢体不自由教育に入り、昨年四月より養護学校で小学  
部二年生の担任として再び精神薄弱児との生活をはじめるに  
なりました。七、八年前とは子どもたちも周囲の状況もすっかり  
変わつて新卒のころのように私には何もかも新しく見えました。  
失敗も多く、永年この道にいらつしやる先生方には当り前のような  
子どもたちの動作の一つ一つがとてもうれしかったり、悩みの  
種になつたりでした。

はじめから学級経営として打ち出せるようなものではなく、当分  
は子どもたちに主導権を渡し、私は楽しい環境作りをしよう、そ  
の子らしさを充分に發揮できるようにと心掛けました。

まだ浅い経験ですが反省の意味も含めてこの一年をふり返つて  
みたいと思います。

### 二

#### 連絡帳について

この学校ではものを言える子どもが少ないので、学校と家庭、  
実際にはお母さんと学級担任が連絡帳を通してそれぞれの場での

子どもの状態を報告しあつたり意見の交換をしています。

この連絡帳に日課とともに時々子どもたちの生活の一こまをで  
きるだけ詳しく記録しました。お母さん方にも子どもたちの小さ  
な動きに興味をもつていただき、その子どもなりの小さな進歩を  
共々喜びたいと思つたからです。

### お母さん文庫

九月からはお母さん方に読んでいただきたい本を集めお母さん  
文庫を作りました。おもなものをあげてみると、田村先生、昇  
地先生、糸賀先生、池田先生の著書、神谷美恵子先生“生きがい  
について”、“人間をみつめて”、パール・バック著“母よ嘆く勿  
れ”、“精薄児の治療教育シリーズ”などです。中でも“母よ嘆  
く勿れ”はほとんどのお母さんが身につまさられ、一息に読まれた

そうです。効果は目に見えませんがこうした立派な先生方の言葉  
はそれなりにお母さん方の心に何かを刻みつけたものと思いま  
す。

### 学級懇談会

月一回学級での懇談会を学校行事とは別にもちたいとのお母さ  
ん方のご希望で、学級懇談会を四月から毎月もつてまいりまし  
た。学校行事と異なり、放課後十人の子どもが飛び交う中の懇  
談ですから、落ちついた話のできないことも多くありました。で

もみんなで子どもたちのお守をしながらお茶とお菓子で世間話を  
するのも、なかなかよいふん団氣でした。連絡帳には“障害児を  
もちろんこんなにも楽しく過ごせて、過ぎていくのがもつた  
ないような日々です”といった感想がありました。楽しいだけでも  
も充分意義があると思うのですが、読書の感想や、子どもたちの  
将来のことなどが話題になり、先日は施設の見学をする計画にま  
で発展しました。

こうした会を重ねることによってお母さん同志の交流、また私  
も仲間に入れていただいてお互に成長していきたいものと思いま  
す。

### 三

#### 学級について

二年生は能力別編成ですので、学級内での能力差はあまりあり  
ません。だいたいの傾向として理解力は一、二歳。運動能力は二  
歳から五、六歳、言語能力は特におくれて一歳前後でしようか。  
遊べない子どもたち

四月当初学級の中ではやんちゃなK君とその相手役のEちゃ  
ん、運動神経の特に発達したIちゃんなどがよく遊びました。ほ  
かはあごにお気に入りの石を打ちつけて遊ぶH君、机の前にすわ

つたままのMちゃん、Tちゃんなど全体に動きの少ない子どもたちでした。その中にあってK君だけが活発で、乱暴でもあり子どもたちから恐れられていきました。K君の移動に伴ってほかの子どもたちも安全な所へ動いていたのです。

#### 音楽にのって

とてもうれしかったことは子どもたちが非常に音楽の好きなこ

とでした。朝、私の顔さえ見れば「コード、コード（レコード）」

とせがむHちゃん、汽車ポップの曲がなり出すとさっと席を立つ

て走り出すMちゃん。四月、五月は毎日レコードをかけては跳んだりはねたり、好きな童謡を転勤早々の学校で思い切り歌いまして。こうして音楽にのって戯れているうちに子どもたちも活発になりました。なり子ども同志の関係もできてきたように思えます。

#### K君のこと

“毎朝敵をむかえるような気持ちでKの目覚めを待ち、スクールバスに乗せて今日一日ほかの家のお子さんにひどい危害を与えないようにと祈る思いで見送り……午後心準備を固めつゝ迎えにいきます。Kがスクール・バスから降りると寝るまで気がぬけません”（連絡帳より）とお母さんに言わしめるのはK君、まさにやんちゃでは天下一品です。はじめのころ私はK君で手痛い失敗をくり返しました。今でも油断すると何かやられてしまいます。

す。ほかの子どもに危害を加えない範囲でK君の自由意志を尊重するようにつとめました。が実際にには集団生活ですからK君にはずいぶん禁止が多かったと思います。近ごろは音楽にのって友だちと飛び回ったり、一つのおもちゃ箱の周りにK君も含めて五、六人集まっている姿を見てほっとすると同時にかわいそうにも思います。

#### 四

#### 進歩の尺度

この子どもたち一人一人の進歩を普通の子どもの尺度で測るうとするといつも同じ所で止っているようですが、よく見るとそれなりに進歩しているもので、そのためには物さしの目をぐつと細かくする必要がありそうです。一例としてS君の経過を追ってみましょう。S君は入学の折、精神科の先生から学校生活をおくるには相当の困難があるとの注意がありました。なるほど片時もじつとしていないし、いつも友だちから離れて廊下や建物のはしお方を一人で歩いています。家庭でも学校でもよく脱出してしまいます。

三学期のはじめS君は一人で着がえをすませていました。この学校では月曜日から金曜日までは学校でトレパン・トレシャツに

着かえます。四、五日ごろのS君はそんなことには全く無関心でした。一学期中はから時々自分でぬぐようになり二学期は寒くなつてもよくシャツとパンツのまま廊下を走りまわっていました。

三学期になつてやつとぬいで着ることができるようになつたのです。（まだ前後、裏表はわかりません）ところが土曜日はシャツとパンツでうろうろしています。ぬいだものの着るもののがなくて困っているようです。服を着せてもすぐにぬいでしまいます。結局十二時の下校まで数回くり返しました。こんな時、言葉の通じない不便さを感じます。

このS君が学級のAちゃんに关心をもちはじめました。“Aちゃん、Aちゃん”とうわ言のようにつぶやき、その声につられてAちゃんが近づくと、戸を開けて背中を廊下にむかって押す。Aちゃんはそのまま外へ、そこで戸を閉める。といった調子です。

何ヵ月かたつとAちゃんに抱きついたり、かみついたりするようになり、二学期に入ると身の周りの世話をしようとする気持ちを見せてくれました。手足の動きのおそいAちゃんは下駄箱の前の仕事がはかどりません。迎えにきたS君は待ちきれなくなつて隣へすわり、Aちゃんの足を靴の上のせ上から手でたたくのです。それでも入らないと今ぬいだ靴で足をたたき、その拍子に興味がたたく方へ移つてしまつたらしく体から頭へとたたきはじります。

でしまいました。表現は適切ではありませんが、人を避けて放浪していたS君にしてはよい方向への変化といえそうです。

放浪癖の方もだんだん行先が近くなり、遂には教室の周りを、そして「ホラ、ホラ」と戸の方を指して私に合図して出て行き、今ではそれもめったにしなくなりました。

積木を一人でトントン組合わせているS君の姿に、ぐつと落ちつきが増してきたように思えるこのごろです。

## 五

この一年をふり返つて思いつくまま書いてまいりました。

学級、子どもたちの指導につきましては、まだ一年ではやつと落ちつき、これからという時期で何か物足りない感じがいたしました。

最も印象に残つておりますのは四月子どもたちと初対面の時のことです。何を話しかけても言葉として返つてくるものがないのにさびしい思いがいたしました。それからしばらく言葉のない不便さに悩み、今は言葉のむなしさを感じております。言葉以上に大切なものを教えてくれた子どもたちに感謝するとともに、これからもこの子どもたちとのお付合いを大切にしたいと思っております。

# 一 片付けーの意味



田 中 祐 次

今日も保育園ではお片付けのレコードが鳴っている。自由遊びが終わってお集まりになる前の片付けはなかなか大変である。先生の声にはげまして、子どもたちは、ちらかって積木やオモチャをしまうのに一生懸命である。保母さんたちも最後にはお手伝いにかり出される。ある子はただかき集めて箱に入れるし、またある子は、いかにもつまらなそうに歩きまるわる。

三、四歳の子どもたちにとっては、お片付けはなかなかの苦痛のようである。だいいち遊びに夢中になつていてる子どもたちは、お片付けのかけ声さえ耳に入らないらしい。お片付けというのは、自分がせっかく楽しく遊んでいるのを中断されることである。このことは、五、六歳いやそれ以上の子どもにとっても同じなのかもしれない。

だいたい、大人は何かとくどく、「やらかしている」とい

う。しかし、「やらかしている」と見るのは他人の目からそう見えるのであって、本人はその状態が今の自分にとってふさわしいのかもしれない。子どもがオモチャを自分のまわりにぎつしりしきつめて、その中で遊んでいるとき、それは子どもにとって一つの世界であり、それなりに彼の目には整理されているのかもしれない。

子どもの世界と大人のそれとでは、占有する物理的空间の広さや関連する他の物への配慮の量の点で格段の差がある。しかし、大人から見たこうした狭い世界も、子どもにとっては、無限の世界にも匹敵する。それは、幼児の自己中心性といふことからも説明されることであろう。彼らの世界は常に現在であり、ここにあるといつてもいいすぎではない。子どもは、遊びに没頭しているかぎりお片付けの必要を感じない。

「片付ける」ということばは、「オモチャを片付ける」と

も、「居間を片付ける」とも使う。のことからも、このことはたしかのように思われる。人は娘を嫁<sup>よつ</sup>がせることを「片付ける」といったり、部屋の中の邪魔なものをとりはらつて、ひろびろさせることも「片付ける」という。しかし、それが、娘を一人前に成人させ、親とともに第二の人生に進むこと、部屋をきれいにして客を迎えることを意味しているならば、それは、あながち、身勝手な態度の表われとばかりいえない。むしろ、目的を意識しない片付けこそ無意味で無責任というべきなのである。

一般に「片付ける」ということは、何か物事が次の時点に移るときにおきてくるものとのようである。われわれの生活では、物事を片付けなければ次へすすむのに不便なことがしばしばである。それは自分のみにとってだけでなく、一つの社会的要請である場合もある。世の中、ただ一人ですべてを仕切つて生きているのであれば、どこがどうなつていようが、いつまで仕事をつづけようが気にすることはない。しかし、

一日に昼と夜があり、一年に春夏秋冬の季節があるのも、人がそれを節として意識し、それによって生活にけじめをつけたためである。人生は長い歴史を通して、この節を設けるこ

との意義を知ったのである。こうした生活の節というものを考えたとき、その節々で自分を振り返り見つめなおすことは、次に進むべきステップを見とおすことにもなる。そして、今までやつてきたことを整理して体制をたてなおす。そこに片付けるということが必要となるのである。

熱力学に関するある本の中で、次のようなことを読んだことがある。自然界は常に熱的平衡の状態すなわち無秩序へと進んでいる。これをエントロピー増大の法則と呼ぶ。そうだが、このような宿命を背負った自然界の中で、人間のこれに逆らう力は大きいといがあるのである。本来、自然界の一員であるはずの人間が、無秩序の状態に秩序を与える特異な存在であるとするならば、逆に、それこそが人間の本性だともいえる。

このように見てくると、「片付け」とは、それ自体一つの重要な創造だと考えなければならない。「お片付け」を子どもたちが進んでやるようさせる方法も、そんなところにヒントがありそうに思えるのである。

(信州大学)

# 私と片付け

堀合文子

“ほら、また出しちゃなし” “文ちゃん、また出しちゃなし、いくら言つてもだめね”

母の声が今だに耳もとにひびく。勉強しなさいという声は耳に残っていないが、これだけは今だに耳の奥に残っている。自分が散らかしたという印象は自分に残っていないが、いつも叱られていたことは覚えている。今の自分を見ても、やっぱり、と自分でも思う。

片付けることはきらいではないが、自分がやろうと思った時は、時間があろうがなかろうがやり出す。結局わがままで気まぐれの一言につきるのかもしれない。自分としても、人の見ても散らかっているのは好きではない。紙が同じ机の上にのっているのも、無難作においてあるのは好まない。紙一枚も意識しておくが、きれいにすつきり片付けてしまうのは年に何回あるかないか

で、片付けたかと思うとまたすぐ物がたまつてくる。きちょう面、きれい好きだから片付けるのと、きちょう面でもきれい好きでも片付いてない場合があるようだ。

こんな私が、幼児に向かつて片付けましょうとか、片付けの習慣をつけるには……と、考えるのは何か面はゆい気がするが、私は、一つの義務、仕事、教育と考えて幼児に対する方法を考えているにすぎない。

幼児の片付けの場合は、言葉で片付けましょうとか、きれいにとか言うのではなく、片付けましょう、と言いながら自分が先達になつて片付けなければ身についた指導にはならない。が、幼児の場合も、即人間として考へても、常に何でも片付けてしまう人には育てようといふのでない。また、何か仕事や、遊びをして次の遊びに移る時は必ず道具を片付けなければという人間に育てようと/or>いうのでもない。また何か物が出ていたらすぐ片付けてしまう人に育てるのでもない。

何でも片付けることができればよいのではないと思う。片付けること一つにも、やはり意義があつて、そして必要に応じてその人が頭を働かせて行動に移す、すなわちやたらにいつもどんな時も片付ければよい子どもだと、私の指導が徹底したと喜ぶのはおかしい。

一生懸命夢中になつて何か作つている時は、下へ紙が落ちてい  
ても、また、机の上が散らかっていても、片付けるより、作るこ  
とに専念した方がよいだろう。しかし、あまり見苦しい時は、先  
生がちょっと拾つてあげたり、ちょっと整理してあげるのは先生  
の大切な心づかいであろう。また、今ここで遊んでいた、しかし  
今いたかと思つたらいなくなつて積木など散らかっている。片付  
けて次の遊びに移らねば……。と片付けさせるのは、やはり幼児  
の気持ちや生活を理解しているとは言えない。これも、もし見苦  
しければ先生が見苦しくなくよせたり、まとめておけばよいだろ  
う。プロ・ックでも砂場でも夢中に遊んでいろいろきていた、が  
おべんとうの時間になつてしまつた。もちろん、その場でおべん  
とうを食べなければならぬ所は、みんなで片付けて、きれいな  
所でおべんとうを食べなければならない。

が何か一つの区切りのように何でもかでも片付けなければとい  
う意識はやはり、遊びを尊重したようでもそれは幼児の生活の流  
れを区切つてゐることになると思う。この点、言葉や文字だと、  
では、片付けないでということになるがそこでの幼児の生活、幼  
児といふもの、幼児の遊びといふものの理解と、見る目とを正し  
く使って、先生がその場で正しく判断する頭を必要とすることが  
先生の保育技術だと思う。

たしかに現在の幼児教育界（といふと大きいが）は片付けは前  
より上手になつたようだが、表面を整えるために片付けたり、幼  
児にやらせたりすることは何の意味もないし、また幼児の中に何  
も育たない。遊びを尊重した指導といつても、目に見えない中で  
幼児の自発性をつぶし形にはめた指導と何ら変りなく、むしろそ  
れ以上こまる結果をもたらすことになる。

幼児が、人間として将来片付けのできない人に育つても困る。  
また、片付け過ぎてきちょう面のようだが、人間的な味、一番大  
切な創造性がかくれてしまうような人でも困る。

こんな所に、"片付け" 一つでも幼児教育の深さと、むずかし  
さが存在する。それを理論で理解しても、実践できる保育者が果  
たして何人いるだらうか。自分もその一人なのだが、幼児教育の  
深さということに、またしてもぶつかる。

現代の世の中に、口で言えぬ人間としてのゆたかさと深さ、幼  
児の独特的幼児らしさ、幼児期にしておかなければならないこと  
と関連して、"片づけ" 一つでも保育者の考慮が一つ一つ大切に  
なつてくる。

"片付け" をさせるべきか、"片付け" をさせないべきか、"幼児  
教育ではこうです" といふことはできない。その場、その場、  
その幼児、を考えていくほかにないと思う。（お茶の水幼稚園）

# 私と片付け

山本秀子

この題を前にして、昨年私の組を都合で一日だけ、先輩の先生にもつていただいた後で、「体操の後、歩いて砂場に入つの片付けはやるけれど、お弁当の前のお片付けはしないのよ……。形式的というか、一斉的というか……」といわれたことを思い出し、改めて私と片付け、いえ私と生活、私と保育を考えていきたいと思う。

私はいろいろなものを、片付けると称してしまったんでしまい、頭の中のこととも書きとめ、きちんとしないと気がすまない性分である。でもそれがすむと自分自身、次をどうしてよいかわからなくなり、それをみつけるため、またひっくり返していることがある。また現在、縁あって、今まで他人であつた主人と生活を共にしてみると、およそ“気持ちがよい”“気がする”という感覚のズレを感じるのである。たとえばものの置き方一つでもそうだし、片付けにとりかかる時

も違う。片や、やりながら考えもし、片付けもし、ものごとの終了とともに片付けも終わる。片や、頭の中であれこれ試行錯誤をつくしてから、間際に行動する。どちらも次の行動には間にあうのだが何とも歯がゆかつたりである。

そんな繰返しの中から、片付けは片付けのための片付けではなく、人と人が生活するため、生活流を振り動かしていくためにするのではないかと思い、雑然としているようでも、そこに住む人にとってあるべき場にそのものがあるようになることや、片付け終わつたと思う時に次へのつながりがついている（何か一つ出ているなど）というふうに片付け感覺が変わってきた。そして散らかって仕方がないということは、生活を固定することなく、次が出てくる可能性を多分に含んでいるとも思え、散らかすメンバーが多いことを羨しくさえ思う。また以前に先輩の先生に「毎日、個人記録をつけ

ていくより、あなたはそのエネルギーをもつと子どもとの場

にぶつけなさい」といわれた意味が、今おぼろげにわかつてきた気がする。「幼稚園の先生の机の上は、きちんとしまないこむのでなく、すぐ仕事ができるようになつていなくては」といわれたことも。

幼稚園の五月ごろ。子どもも園生活に慣れてくると「バクハツ！」といって積み木をガラガラこわしたり「おひっこし」といつてありつたけのおもちゃを運んでゴチャゴチャにすることが出てくる。そんな時、お手伝いさんになって仲間に入り、片付けたりして、子どもがまたそこから考えて次の生活がつくれるようあるまう。形をきれいにするだけでなく、一つこわれたらバッとやめてしまうのではなく、じっくり考えていくよう、先生が率先してあそび出したりとする。私などはこんな時どうしてよいかわからず手を出さないでいたり、出でても子どもぬきの形のみの片付けをし、子どもの意欲をそいでしまう失敗を何度もしてきた。おもちゃが落ちていれば拾いながら通りぬけたりなど、先生のふるまいとかもし出すふん興氣とで、子どもが自分の行動体系にとりいれていくよう助けていく。さらに子ども自身が気持ちのよいことは先生も気持ちがよいんだというつながり、共感が片付け

の根本にもなるし、大切な幼児教育でもあると思う。

「お片づけってなに？」という四月の子どもを前に、先生が全部片付けるくらいから始まり、「積み木屋さんはいないかしら」と声をかけ、自分からしてくれる人をふやし、お片付けルートにのせていく。保育後にも子どもとの生活を考えたの大人的片付けがある。その繰返しが子どもに伝わり、いわなくても先生のしていたとおり戻してくれたり、大切なおだんごをそつとすみに片付けたり、というほほえましい片付けにつながっていく。子どもを忘れた大人だけの気持ちのよさで片付けたり、おしつけ的な言葉やあるまいで動いた結果が、冒頭の“自分から片付ける気持が育つていない”という言葉として出てきた気がする。

子どもがあそんでいる中にも「ルートにのつたあそび方」として片付けの指導が含まれ、次の行動に移る区切りにも片付けがある。ともに子どもと大人がじっくりと次を考え、自分から動いていく生活をつくるためのよいチャンスであり、幼児教育のすべてにつながる大切な部分であると思う。

(あと お茶の水幼稚園)

橋詰良一著

## 「家なき幼稚園の主張と実際」より(四)

### 第七 若き保母の修養

私は前にいった通り、単に純情を持つ娘と神性の輝ける

幼児とを結び合わせておきさえすれば、おのずからのうち  
に自然の愛の発露となり、愛の道場の構成となり、また幼

児保育という方面から見ても、さまざまなかた案や創意が現  
前するものであると確信していますが、若き保母の心の養  
い、品性の修養といふようなことについては、全然何らの  
考慮をも要しないとするのはありません。

むしろ、大いに読書し、大いに修養しなければならない  
ことを力説するものであります、いたずらに難解の書物  
を机の上に置いて誇りとしたり、高尚な名の書籍をかかえ  
まわつて、かえつて各自の謙徳をそこなうようなことのな  
いようと願つておりました。

それで、わずかに四、五種の書籍を選んで幼稚園の賓典  
とし、常にこれを味読するようにとすすめまいりました。

その賓典というのは、

一、自由教育論

(小原国芳著)

一、幼稚園の理論と実際

(森川正集著)

一、児童の生活と芸術

(島村民藏著)

一、新興芸術と新教育

(志垣 寛著)

一、子どもの遊びせ方

(阪内みつ子著)

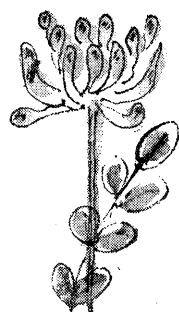
一、母のための教育学

(小原国芳著)

一、我が子の教育

(西村伊作著)

右のようなものであります、フレーベルやペスタロツ  
チの教育書は割合にその多くを各園に蔵しています。



### 高師の保母科へも

このように保母の各自が自習自学して、子どもの国に同和する道を創意し発明するよう祈願する一方において、大自然を園舎とする神の國の心を根底にひかえてから、更に進んだ保育教育の研究を重ねることも非常に必要なことであると考えていますために、一两年以来はわが園からの選抜者を奈良の女子高等師範学校保育科へ留学させてまいりました。

これは今後もながく、多く続けて行きたいと願つていることで、更に進んでは海外への留学者をも派遣して世界的の考究をもたさせたいと思っております。

清きに触れて児童愛の道を大成したいと祈つてゐるのあります。

素人主義というても、かの卑しい高ぶりから逃れたいための方策であつて、決して無智のみを尊奉するものでないことを改めここに言明しておきます。

### 保母総会と交代勤務案

各地の家なき幼稚園の保母三十人ばかりある園に集

めて、互いに違つたことを聞いたり話したりするのは何よりも楽しくタメになることだと思います。

他の園とはちがつて、ほんとに肉身の兄弟のような幾つかの園が事情の異なつた場所に成育している現状を利用し、折々その人々の親睦会を開くことにしていますが、研究よりも遊ぶことが主になりやすいきらいはありますがあまことに楽しいものになっています。

それと同時に、兄弟なればこそできるのだと思われる案は、折々入れかわつて、三日か一週間かの交代勤務をしあうことですが、これは考えたままで実行していません。それには何らの支障もないのですけれど、私があまり多用なためについ手が回らなかつたにすぎませんが、近く実行するつもりです。

こんな後には、必ず意見の交換をして、それを記録しておこうはずですが、互いに語りあううちに得る啓発の尊さに、今更ながらおがまれます。

### 参観の奨励

私はまた他の幼稚園の参観を極度に奨励してまいりました。ほんとに百聞の一見に及ばざる場合をたびたび実験し

できました私は、つまらぬ教えよりも他の参観のまさる」と幾百倍なるを信じていますので、暇があつたら、参観せよ参観せよとすすめてまいりました。

それには、やがて謙虚を要とする趣旨をいい添えるのが常であります。若い人たちは相応に私の心持ちをのみ込んでくれて、大概是よく学んでくるように思いますが、この謙虚さを受取らずに、かえって妙なことを言う人のある

のに驚きます。ある園にまいりました時に

「家のない幼稚園の人が、家のある幼稚園を参観して何になさるのですか……」

「見なさるのではなくて、穴ひろいに来なさるのではありますか……」

と言つたような、露骨にして、醜悪な言葉を弄されたのをも忍んで帰つた談がありました。

ほんとにイヤな世の中だと思わせられることがたびたびあります。それが若い娘たちには言つております。でも、見てきた所感にはなかなかがつたのもあります。

### 参観記の一

栄子

第一日（三月十日） K幼稚園

十時ごろ急いで○○○幼稚園へ行つてみましたが、誰も見えないので、仕方なしに線路をわたつて○○○幼稚園を訪ねながらまいりました。

今井先生がお一人で、小使も使わないで、二十人ばかりの園児をあずかつていらっしゃいます。その日は十五人しかきていたなかつたので静かなことは、これでも幼稚園なのかと思ったくらいです。男の子も女の子とほとんど一律の行動をしていたことは、私らには意外でした。

わずかな園児だから一人一人の個性をよく見て、各その個性の向かう所に発展させてやることは、この園ではいくらでもできるだろうに、何だか上からおさえつけられて、ある程度以上にのびることを許されていないような感じがしました。言葉使いといい、動作といい、ひつ竟

子どもの境遇が揃い、年もかなり同じくらいだからいつわりのない所かもしれないが、これがもし幼稚園においてのみの言葉や、動作だとすれば、子どもはどんなにきゅうくつなことでしょう。

子どもの絵の上手なのに何より驚きました。めいめ

いのブックに自分の造った手技を張らせるようにしてあることと、帰りに「さよなら」のお唱歌を歌わせることはいいでしょう。この保育案は一週間ずつ作られてあるそうです。一日も早く園児の揃うことを祈って午後三時半ごろ帰路につきました。

### 第三日（十一日）○○○学院附属幼稚園

十時ごろお遊戯の最中におうかがいました。主任の先生がお休みで若い先生がお二人でやっておられました。ここも園児が七十五人だそうです。この子どもを見た時にア、これが真の子どもだと思いました。何ものにもはばかる所なく、自分の思うままに、したいままにやっています。また先生もいちいち干渉ならないで、本当にするままでさせてありました。けれど決して無責任なうつやらかし方でないでしょう。子ども自由を与えられた時には相当責任を感じることはおもしろいと思いました。これは池田の子どもを見ても、私はいつもそう思っています。

しばらくの間にガラスは割る、つかみあいはする、やんちゃの程度は池田と少しも変わらないです。泣いた時も、あまりしつこく聞かないで、いい加減にしておく

と、いつの間にか泣きやんで笑っています。ここでも一枚のノートを作つて、書き方の時にはそれにかかせ、自分で造った手技なんかも、それに張りつけるようにされました。お遊戯は、男女別にされていたようですが、これもお遊戯によつていいかも知れませんが、やっぱり遊び時には一緒に遊び、遊ぶ時には一緒にさせた方が、遊戯をしていても気が散らないし、遊ぶ時もその方が一層楽しいだらうと思います。ここも帰る時はさようならの歌を歌つて帰ります。これは是非池田もしたいと思いました。主事の先生にお目にかかるて五、六分間お話しして、小学生用の英語のリーダーや学院の絵葉書等をいただきて一時半ごろ帰りました。

### 第三日（十二日）宝塚なき幼稚園

広い芝生、青い松、白い砂、美しい流れ、赤い橋、周囲のすべてのものは私たちをたまらなく羨しがらせる、自然に恵まれているここの中児はどんなに幸せでしょ。けれど今はまだあまりにおとなしすぎます。自由遊びもすべて先生のさせるようにして、お友だちどうしで遊んでいた子どもはごく少なかったと思います。一面の芝生だから、ほこりも少ないと思うのに、食事の時に口

までゆすがせられる、その衛生の行届いたのには感心しました。午後のお稽古が始まろうとしている時に池田からのお淡河さんの凶報に接して私たちは遺憾ながら引上げて池田に帰りました。

こうして私たちの三日間にわたる各幼稚園参観は無事おえたものの馴れない私には、まだまだ目の届かなかつた所の多くあつたことを悲しみます。

#### 若き女性独自の発達

私は保母たるべき女性の独自修養に大きな信頼を持つものですが、先輩の教導なしには到底なされるものではないかと感じられるほどの「手技」でも、いつたん幼児の愛に目ざめた若い女性たちが、そのかわいさにそそのかされ、一生懸命になる結果は、いつともなしに覚えてしまつて、二年たたぬ間には立派な先生の手際を發揮します。

それにはまた相当な教授書もあるので、あまり多くの不自由もないようですが、楽器の奏法等でもずいぶん眼に立った熟達ぶりを示すのに驚かれます。

特に驚くのは保母らしい気持の、いつとはなく養い成されていくことです。この日記の一節をご覧になつたらうなずかれるところがあると思います。

#### ◇ 言葉づかいについて 秋子（大阪）

子どもには否定の言葉を与えないようにそつちへ行ってはいけません、という代りに、こつちへいらっしゃい、といふようにせよと何かの本で読んだことがある。その後私はいつも気をつけて物を言うようにしている。積木をしてはいけませんという代りに、積木はやめてかくれんぼをしましょう、というように。

子どもには、何をしてはいけませんと言うより、ほかの何かをしましようと言つた方がずっとおだやかでもあり、気持ちを伸ばす上に効果がある。ただし急いでいる場合にはいつもその心掛けを忘れてしまう。特に電車の乗り降りなどの場合飛び降りてはいけません、窓から顔を出してはいけません、手を出してはいけません、等、自分の気があせればあせるほど、いけませんを連発してしまう。叱るつもりではない注意するためのいけませんを言つてゐるつもりでも子どもにはお小言に聞こえるとみえて、びっくりして

言うことを聞く。気をつけて、前へ出てはいけません、と  
いう代りに後へ寄りましよう、と言った時には、甘えて何  
度言つても言うことを聞かないことが多い。こうした時に  
は、やっぱりいましめる意味において、いけませんを使つ  
た方がいいかもしない。その瞬間だけずつ子どもを、ち  
ぢませるような気がするけれど。

◇ 困らされるほど

幸子（池田）

日々が無事に過ごしていけるほどうれしくありがたいこ  
とはありません。今年の子どもたちは本当に素直ないい子  
ばかりです。それだけいたずらな子どもが目立つてみえる  
ようにも思います。

みんながいい子になるように努力していきたい。それ  
私が私たちの念願なのです。E坊がいつも問題になりま  
す。問題になるだけE坊さんは意地をはります、もつとも  
つと暖かい心でいたわってやりたいです。本当の愛を注ぎ  
かけてやつたら……と思います。そう思った時人間の愛の  
不徹底さを思わずにはいられません。

きつときつとよくしてやります。けれどお母さまもほう  
りはなしでなく考えてあげてほしい。一人の子どもが素直

になることはどうれしいことはありません。困らされれば  
困らされるほど、何だかたまらなくかわいくなってきま  
す。努力してまいりましょう。子どもたちが共同生活をし  
ているのでなければと、こうした時に思うのです。ほかの  
かわいい子どもたちに何か悪い影響があつたらと。

## 第八 私の保育案

私の野の幼稚園を子どもの国にして、幼児相互の生活を  
便宜に、無難に、健全に、また愉快に、営ませるための  
「保育案」とも言うべきものを簡単に工夫しておきました。

それを厳格な意味での保育案と見てもらつても差しつか  
えはありませんが、私はそれを若い女性たちのため、わ  
ざかなしおりだと考えていました。

この最初の工夫が半年も一年も、そのままに継続するも  
のであらうか、また人々の工夫によつて、どんなに変化さ  
れて行くものであらうかは、全然予想することなしに一む  
しろ適当な変化を希望しつゝ着手したのでありました  
が、意外にも思ったほどの変化なしに、大かたそのままの  
形を七年も八年も持ち続けているには、一種の失望をさせ

感するのですが、これを一面より見れば、あるいはそれだけの変化を要しない特徴を持つてゐるのかとも考えられます。

もしそうだとすれば、わざながらも心丈夫な気がする

ると同時に、最初からの望み通り、簡単で、明りょうで、

無難であるようとの目的にかなつたものだと思われま

太郎ちゃんも

花ちゃんも

みんなで一緒に

なかよくうたいましょう

一同お礼をしてから手をたたいてこの歌をうたいます。

それから記章を集めて先生の手に預かり、お話をしたり、

歌をうたわせたりしながら、外へ出るのですが、このお宮

様にお礼をすることは、今日もまた一日ここで遊ばせてもらいますといふ感謝のつもりで、いつとはなしに感謝とい

たのですが、お宮様という対象に直面しますため、どうして朝のごあいさつをさせたくなります。そこで次のような歌をつくって、それを歌わせることにしました。

### 一 お宮の神様おはようさん

お遊戯してからどうしましょう

### 回遊

山にしようか

川にしようか

先生と一緒に

どこへでもまいります

### 二 私の母様お当番

お手々をひいて遊びましょう

この「回遊」と私の名づけておりますものは、幼児が大自然の中を縦横自在に歩き回ってその大自然を通じた神の心に神の靈に達しさせようとするフレーベル氏等の提案を最も簡明に具体化した方法として尊び用いようとする案で、川に行けば水に遊び、石を積み、山には自然の音楽に耳をかたむけ、野には神秘の妙景に目をよせて歌いながら

歩きながら、自然の観察をあくことなしにさせようとする唯一の保育案であります。砂箱もその中に、粘土もその中に、自由画の画題もその中であります。お話をその中で、童話劇もその中で、大きな自然を生きたバックとして自由に演出することができるのであります。この回遊をむさぼっているわが園の生活状況を見て、まことに放浪的な、無意義な、粗策な方策であるように評する人々にいくらもの後出会いましたが、これはほとんどそのすべてが、回遊の真意を了解してくれない、浅薄な批評にすぎないもので、たまたま評者の愚を氣の毒に思うことはあっても、それによつて別のより深い啓示を得たことはありません。

この回遊には簡単な楽器や、こざ等、子どもの後から車で運んで行つて、野をそのままの音楽室、遊戯室にするのが最も愉快な仕事になつております。

(中略)

#### 遊具は木煉瓦

先に準備の時に申しました木煉瓦を、最初は小二百個、二倍百個、三倍五十個（後に四倍五十個）を絵馬堂の中に積んでおいて、お宮の広庭で勝手気ままに積ませることにきめたのですが、これは実に旺盛な幼児の創作欲と、大き

なものを好む子どもの境遇とに合致したものとみえて、今もなお非常に歓迎され日々大きな創作を試みております。

この煉瓦というものの大きさがいかがなる標準によつてつくり出されたものかは知りませんが、横にも縦にも厚さにも、それを倍加すれば必ず正方形をつくつて行くこの大きさが建築の要素をなしてゐるようすに、子どもの創作の要素にも採用されやすいものと見えます。これほど便利な愉快な自然遊具が今まで閑却されていたことを、むしろ不思議に思うのです。

(中略)

#### 室内の作業

雨の日や、酷暑の日など、野外の遊戯保育に適しない場合を、室内の作業にあて、最初は絵馬堂の下で折紙や自由画やその他の手技をやらせることに想定しました。その時にはこざを敷いて、それへ腰をおろしその前へ畳椅子をおいて、その椅子の上にボール紙の板やまたは粘土板などを置いて簡単に机の代用とさせる案を工夫していましたが、これも相応便宜なものとして持続されています。

(つづく)

子どもと共にいると、世界がひろくなる。子どもの遊びは、これからどうしなければならぬという道筋のついたものではない。そう考えるのは、大人の世界である。子どもには、遊ぶこと自体がおもしろい。遊んでいるうちに、次のことが生まれてくる。その遊び子どもと共にいると、世界がひろくなる。

おにごっこをしている子どもがいる。

おにごっこをしていると見るのは、大人の眼である。子どもの世界では、まず友だちと共にいるたのしさがある。追いかげられたり、息がきれるまで走ったりするときの快さがある。その世界にいれてもらうと、子どもと共にいる瞬間は、何と広い空間だろうと思う。

自分が子どもだったころ、友だちと遊ぶことが、ただひたすらにおもしろくて、いつのまにか、あたりが暗くなりかけていることがあったことを思い出

す。その夕闇の果ての方に、すでに現在の自分もあつたような気がする。

すぐ先のことを煩い、昨日のことに心が病んで小さくなろうとする大人の生活は、子どもにふれるときに、もっと広い世界に解き放たれる。子どもと共にいることを仕事とできる人は、しあわせだと思う。

子どもと一緒に場所にいても、子どもと共にいない時がある。次の段どりを考えたり、何かをしなければ専門家でないようになってあせる時などである。

大人には、大人の生活があるが、子ども仕事をする者には、子どもと共になる世界に身をゆだねる瞬間がある。それは何と大きな幸いであろうか。そのことなしに、教育も研究もないと思う。

## 幼児の教育 第七十三巻 第五号

五月号 © 定価一七〇円

昭和四十九年四月二十五日印刷  
昭和四十九年五月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内  
編集者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会  
印刷所 図書印刷株式会社

108 東京都港区三田五ノ二ノ一  
大塚二ノ一ノ一

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一  
発売所 株式会社 フレーベル館  
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

(津守 真)

# ぼくとあさがおの背くらべ

キンダーあさがお栽培セットは、お子さまの観察力を育てます。



## ●キンダーあさがお栽培セット

### ●種子・培養土・養液・苗床・鉢12個付

あさがおの栽培は、手入れが簡単で、発芽から開花までの変化が著しいため、日常生活の中でお子さまの観察力を育てるのに最適です。

## ●栽培用具(プラスチック製)

### スミベッド

長さ53cm 幅27cm 高さ21cm

### プランター

長さ66cm 幅22cm 高さ19cm

### グランドプランター

長さ80cm 幅28cm 高さ29cm

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**

# 思いっきり遊ぼう!

保育キャリーは、遊びをより楽しくします。



## 保育キャリー

(A)……袋式

フレーム(クリーム)一式 袋(紺) 1

(B)……カゴ式

フレーム(クリーム)一式  
カゴ(水) 4 棚棒 2 止め具 4

●いずれも高さ75cm 幅44cm 長さ71cm

キンダー砂場セット新型…1セット

砂 型…20コ シャベル…40コ

フルイ…10コ バケツ…4コ

整理用カゴ…2コ

キンダーカラーボール(ビニール製)

大 中 小

キンダードッジボール…6色1セット

直径18.5cm 特殊ビニール製

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館